

龍谷大学大宮図書館

二〇二六年度特別展観

龍谷大学大宮図書館

今昔物語



龍谷大学大宮図書館 二〇一六年度特別展観

龍谷大学大宮図書館

今昔物語

龍谷大学大宮図書館 今昔物語

目次

展観の開催にあたって

図録

I 大宮図書館と龍谷蔵

1 龍谷大学大宮図書館概要

2 龍谷大学図書館新築記念絵葉書・灰皿

3 「龍谷蔵」開設に関する一件書類

4 「龍谷蔵」開設記念善本集粹

5 学校法人龍谷大学大宮学舎大宮図書館改修工事竣工図

6 学校法人龍谷大学大宮学舎大宮図書館改修工事竣工写真

II 龍谷蔵の宗教資料

7 顕如宗主讓状写(「顕如上人讓状写」一巻の内)

8 教如前宗主請書写(「先信浄院礼納後状写し」一巻の内)

9 准如宗主請書写(「准如上人讓状」一巻の内)

10 准如宗主代替わりに付教如前宗主裏書・申物等覚書(「夏のふみの事」一巻の内)

11 顕如宗主御影裏書

12 川那部新尉誓詞(「下間刑部卿請文」一巻の内)

13 中将昭恵(常楽寺准賢)誓詞(「文禄書札」一巻の内)

14 准如宗主自筆消息(「准如上人御書」一巻の内)

15 大谷本願寺通記

16 御文章

17 正依修多羅獅子吼図

18 地獄極楽絵図

19 嵯峨光仏縁起

20 十卷抄

21 五輪九字明秘密釈

22 大清三蔵(龍蔵)

23 サムット・コイ

24 論語集解

25 新旧約全書

26 古蘭天経

龍谷大学図書館長 安藤 徹

4

6

7

8

9

10

11

13

14

14

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

III 龍谷蔵の多彩な資料

27	算用記	34
28	新編塵劫記	35
29	紹興校定経史証類 備急本草	36
30	瓢之図	37
31	花鳥図	37
32	大谷尊由師書画卷「飲中八仙歌」	38
33	源氏画	39
34	源氏物語絵巻	40
35	平家物語	41
36	三条西公条 自筆稿本 源氏物語細流抄	42
37	奈良絵本 竹取物語	43
38	奈良絵本 大和物語	44
39	奈良絵本 志賀物語	45
40	奈良絵本 長恨歌	46
41	奈良絵巻 武家繁昌	47
42	狩野派習画巻	48
43	喪礼備要	49
44	新鐫海内奇観	50
45	増入諸儒議論杜氏通典詳節 新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節	51
46	古今游名山記	52
47	旅行教範	53
48	トランシット・高度計・懐中時計	54
49	仏説延寿命経	55
50	印沙仏	56
51	西夏語六祖壇経	57
52	ウイグル語収支決算報告書	58
53	菩薩頭部	59

・ 展示順序は、図録の掲載順と異なる場合があります。

・ 展示資料のうち、参考展示など一部の資料については本図録に収録していません。

展観の開催にあたって

龍谷大学図書館長

安藤徹

龍谷大学には主なキャンパスが三つあります。大宮学舎、深草学舎、瀬田学舎です。それぞれのキャンパスには図書館が設置されています。そもそも、大学に図書館を設置することは法令上の定めによります。したがって、図書館とは大学に「なければならぬ」教育・研究施設であり、「あつて当然」の学修施設です。そのことは、高等教育機関においていかに図書館が重要であるかを物語っています。

とはいえ、大学図書館はけっして一様ではありません。一つとして同じ大学がないように、全国に一四〇〇館ほどある大学図書館(分館・分室を含む)は、それぞれに固有の歴史と特徴とを有しています。それは、本学の三つの図書館にもあてはまります。大宮、深草、瀬田の各図書館は、果たすべき使命を共有しつつも、それぞれのキャンパスの歴史と特性に応じてじつに個性豊かで魅力的です。

なかでも、大宮図書館の特徴はやはり「歴史」です。大宮の地に独立した建物としての図書館ができたのは一九〇八年(明治四一)です。そのころ、本学はまだ「仏教大学」という名の専門学校でした。その後、一九二二年(大正一一)に旧大学令によって大学として認可され、「龍谷大学」となります。したがって、「大学」としての龍谷大学よりも大宮図書館のほうが歴史が長いと言えます。むろん、本学の起源は一六三九年(寛永一六)に本願寺境内に設置された「学寮」にまで遡ります。しかし、学寮創設後の早い段階で、すでに現在の図書館に相当する機能(図書館を構成する要素)もありました。ここで強調したいことは、大宮図書館が本学の紡ぎ育んできた長い歴史と伝統の大切な部分を確実に担ってきたという事実です。

現在の大宮図書館の建物は二代目にあたります。完成したのは一九三六年(昭和一一)ですから、今年で八〇周年です。同時に、貴重資料を保管する「龍谷蔵」が館内に設置されて五〇周年になります。さらに、二〇〇六年(平成一八)に大改修工事が完了し、いまの姿になってから一〇周年でもあります。このように、大宮図書館にとって記念すべき年に開催する展観のテーマは、図書館の「今昔物語」です。図書館の歴史を語る資料や、図書館が誇る貴重な資料の展示を通じて、図書館の「歴史」に触れていただくという、まさに直球

ど真ん中の企画です。

『今昔物語集』に次のような説話があります。話の主人公は父を亡くした兄弟です。「今は昔」、亡き父を恋慕う兄弟が、しばしば父の墓前に行き、さまざまな嘆きを訴えていました。やがて、二人は役人として忙しい日々を過ごすようになります。そのうち、兄は父を追慕してばかりいられないと、思いを忘れさせてくれる「萱草」を墓のそばに植えます。その後、弟が墓参に誘っても、兄は何かと都合の悪いことが重なり、行かなくなります。弟は、せめて私だけでも父を慕う心を失うまいと、思いを忘れさせない「紫苑」を植えました。すると、あるとき、墓の中から、「父を思うお前の心に感心したので、その日に起る善悪のことを予知夢として見せてやろう」という鬼の声が聞こえました。その後、弟は実際に予知夢を見るようになった、という話です。事前に善悪が分かるようになった弟は、当然、幸福な人生を歩んだことでしょう。

この説話からは、「過去を忘れないことが、善悪を見分け、豊かな未来を拓くことになる」という教訓を読み取ることが出来ます。「過去を忘れない」は「歴史を／＼に学ぶ」と言い換え可能でしょう。「今日が最初の日であるかのように、毎日、新しく生活を始めること——しかし、一切の過去、その一切の結果、忘れられぬ一切の古いもの、それらを必ずそこに集めて、前提とすること」こそが「人生の本質的な問題」だ、というゲオルク・ジンメルの言葉も思い出されます(『愛の断想・日々の断想』岩波書店(岩波文庫)。大宮図書館の「今は昔」の物語から、ぜひそうしたメッセージを受け取っていただければ幸いです。私どもの願いは、今回の展観が皆さんにとっての「紫苑」となることです。

本学図書館のホームページでは、今回展示したものも含め、多くの貴重な資料をデジタル画像として積極的に公開しています。なお、今秋、図書館システムの更新に伴い、ホームページも新しくなりました。情報検索機能の強化をはじめ、利便性の向上を図っていますので、ぜひそちらもご利用ください。

本展観開催にあたり、図録作成等にご協力くださいました本願寺史料研究所および龍谷ミュージアムに深謝申し上げます。

二〇一六年一〇月

I 大宮図書館と龍谷蔵

大宮図書館が現在の場所に設けられたのは、今から一〇〇年以上前の明治四一年（一九〇八）です。当初の建物は、大阪南警察署の建物を移築したもので、現在は瀬田キャンパスに移築され、「樹心館」として礼拝の場となっています。その後、学生数と蔵書の増加により、昭和一一年（一九三六）に鉄筋コンクリートによる近代的な建物に生まれ変わりました。平成一五年（二〇〇三）から平成一八年（二〇〇六）には、中庭スペースを図書館フロアにする改修工事を経て現在に至っています。

また、龍谷蔵は、大宮図書館が近代的な建物になった三〇年後の昭和四一年（一九六六）に、蒐集してきた貴重資料を火災から守るために、館内に耐火書庫として設けられました。『御文章』をはじめとする仏教典籍、国宝『類聚古集』などの古典籍、大谷探検隊将来資料など、図書館の特色のある資料が収蔵されています。現在は、大宮図書館の改修工事に伴い一階に新設され、耐火だけでなく、二四時間温湿度を管理して、貴重資料を保管しています。

ここでは、大宮図書館の建物の歴史にまつわる資料や龍谷蔵の設置に関する資料を展示いたします。建築関係の資料ばかりでなく、絵葉書などのグッズなども紹介します。

龍谷大學圖書館概要



龍谷大學圖書館



龍谷大學圖書館



龍谷大學圖書館

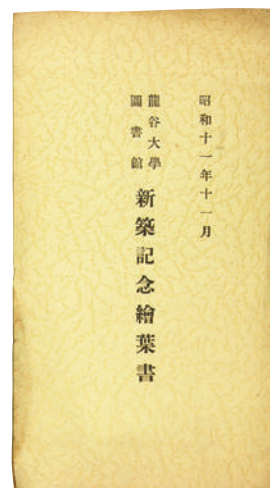
1 龍谷大學大宮圖書館概要

龍谷大學圖書館編纂・発行 昭和二十一年発行
縦八・九×横一三・二cm

現在の龍谷大學圖書館は、昭和二十一年（一九三六）に建築された。竣工した圖書館の概要を一冊にまとめ、開館に合わせて発行されたのがこの資料である。内容は、館内要所の写真、平面図が最初であり、続いて圖書館沿革略、建築及設備、蔵書概要、分類法及目録概要、閲覧統計、館務分掌及職員順で記されている。

途中、「龍谷大學圖書館分類要目」が折りたたんである。これは現在龍谷大學圖書館で使用している「龍谷大學十進分類法（RDC）」の要目である。

概要の中で当時、館長、助手、給仕、清掃者などを含め、全二十七名の職員が在職していたことが記されており、圖書館の管理運営に力を注いでいたことが窺われる。



2

龍谷大学図書館
新築記念繪葉書・灰皿

繪葉書 四枚 龍谷大学図書館編 昭和十一年発行
 ケース縦一八・六×横一〇・二cm 葉書縦一四・一×横九・一cm
 灰皿 龍谷大学図書館製作 縦一〇・五×横二三八×高さ六七cm

現在の大宮図書館が昭和十一年（一九三六）に竣工・開館したことを記念して、当時の建物全景や館内の各施設を紹介した繪葉書を製作した。全景一枚、陳列室・書庫一枚、講堂・新聞室廊下一枚、閲覧室・玄関一枚の全四枚一組である。

また、灰皿も建物新築を記念して製作された。図書館の外観をデフォルメしたデザインが取り入れられていて、ユニークな灰皿となっている。

「龍谷蔵」設置に関する記録

(昭和三十九年六月二十一日)

昭和三十九年十二月二十八日
かねて眞鍋館長の発案によつて話題に上つて来た。本学貴重書の収蔵庫設置の事を具体化するために昭和四十年年度図書館の事業計画の一つとして昭和四十年年度大算予算中「貴重書収蔵庫」営繕費金三百万円也と計上されるよう予算案と作製して藤藤経理課長のもとへ提出した。

昭和四十年六月二十一日
四十年年度第一回文経合同図書委員会席上眞鍋館長から「昭和四十年年度図書館事業の一つとして貴重書収蔵金庫室と設置(現在雑誌整理室を改修して是れ

龍谷蔵設置経過報告

昭和三十九、二、二八 予算案上程
四〇、六、二一 文経合同委員会
八、二八 諸工事見積と総務部で立案
八、二四 立案決裁
九、一 監理工の開始
一〇、一七 書庫以外の工の完了
一一、一七 経費の算入
四一、一、二五、 新図書室と文庫、充てん費の滞り等と預けたお礼の上F内(お頭)庫室と「龍谷蔵」として準備中
下りよう滞り等と同一
一、三〇、 予算案で蔵室部と通して「龍谷蔵」下り準備中

3 「龍谷蔵」開設に関する一件書類

- 龍谷蔵開設申請書及予算概算書 縦二五・五×横一七・七cm
 - 龍谷蔵設置経過報告書(二部) 縦二五・〇×横一七・〇cm
 - 龍谷蔵竣工披露願書 縦二四・〇×横一七・八cm
 - 竣工式招待者名簿 縦二五・〇×横一七・〇cm
- (請求記号〇〇〇・一一九一一)

大宮図書館は昭和十一年(一九三六)に新築され、昭和四一年(一九六六)にその三〇周年記念として、貴重書を保存管理する収蔵庫「龍谷蔵」を開設した。本資料は、それまでの経過についての書類一式である。その内容として、申請書、予算概算書などや竣工式への招待者名簿、出欠返信葉書、祝電などがある。また竣工式当日ご来館された本願寺門主(勝如上人)御夫妻の記念撮影写真などもある。



4

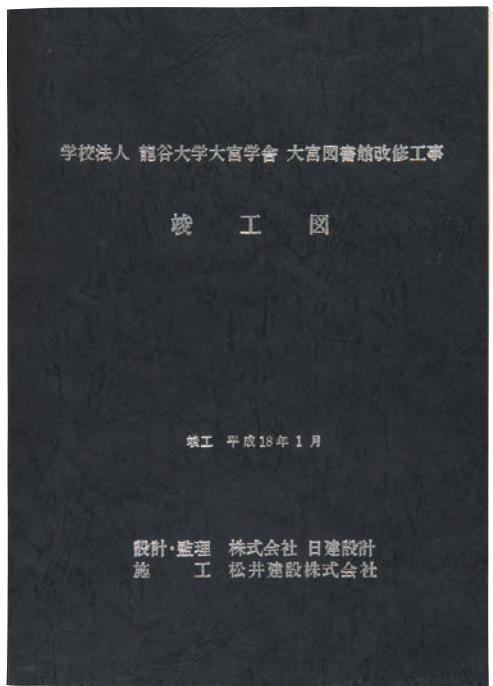
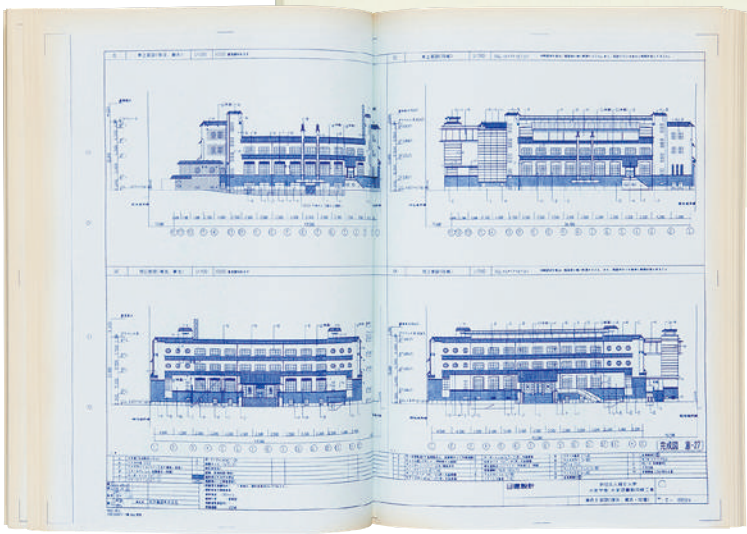
「龍谷藏」開設記念善本集粹

繪葉書 六枚 龍谷大学図書館編 昭和四一年発行

ケーヌ縦一八〇×横一一・〇cm 葉書縦一四・一×横一〇・一cm

(請求記号〇〇〇・一一九一一)

昭和四一年(一九六六)五月二日、貴重資料の保管に万全を期するために堅固な収蔵庫を設置し、「龍谷藏」と名付けた。その開設を記念して発行された絵葉書である。『聖徳太子和讃断簡』『黒谷聖人語灯録』『伏羲女媧図』『古浄瑠璃志んらん記』『混一疆理歴代国都之図』『龍谷藏(扁額)』のモノクロ写真六点をセットにしたものである。



5

学校法人龍谷大学大宮学舎
大宮図書館改修工事竣工図

設計・監理 株式会社日建設計 施工 松井建設株式会社
 二〇〇六年一月竣工 縦一九・一×横二〇・七cm

竣工図は、二〇〇三年から二〇〇六年にかけて大改修された大宮図書館の完成図として作製されたものである。本来の用途は、改修された建物の維持・管理及び将来の増改築などに必要な基本情報を提供することである。外観や各フロアなど普段目にする部分の図面の他、防水や断熱材の設置箇所など細部の図面も収められている。

将来的には、改修当時の大宮図書館を知る貴重な資料となろう。



西面外観

6

がっこうほうじんりゅうこくだいがくおのみやがくしゃ
学校法人龍谷大学大宮学舎
 おおのみやとしょかんかいしゅうこうじしゅんこうしゃしん
大宮図書館改修工事竣工写真

建築主 学校法人龍谷大学

設計監理 株式会社日建設計

施工 松井建設株式会社

縦三三・〇×横二五・八cm

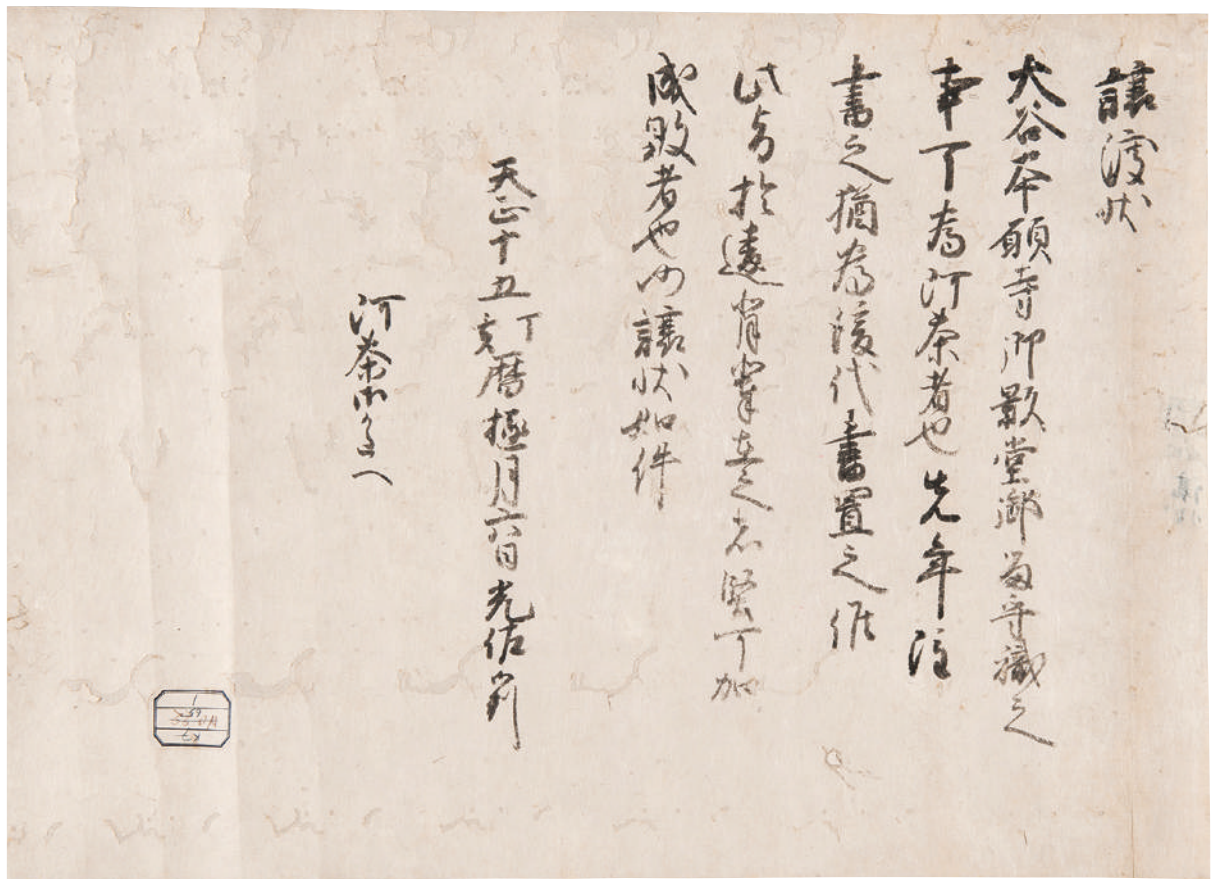
二〇〇三年から二〇〇六年にかけて改修工事が行われた大宮図書館の竣工写真集である。図書館の外観を始め、正面玄関・エントランスホール・各階閲覧室・貴重書庫など五五枚の写真が収録されている。

また、改修前の外観や閲覧室・研究室廊下などの写真も収められており、改修によってどのように変わったかを比較できるようになっておる。改修の様子を詳しく知る資料として貴重である。

Ⅱ 龍谷蔵の宗教資料

龍谷蔵には、浄土真宗を中心に数多くの仏教典籍が収められています。しかし、実は、仏教以外の幅広い宗教の典籍も収められています。当初は、浄土真宗関係の典籍や文書が主な収蔵資料でした。やがて、多様な蒐集により、日本や中国の仏典だけでなく、東南アジアやチベットの仏典、さらには儒教、キリスト教、イスラム教などの資料に及んで、今日に至っています。

ここでは、本願寺に關係する文書、大藏經、東南アジアの仏典、聖書やコーランなどの資料の他、人々に分かりやすく仏教を説くために作られた掛け軸などを紹介いたします。本学の先人が、仏教ばかりでなく、広い宗教の視野を持って蒐集を続けてきたことがお分かりいただけると思います。



譲渡状

大谷本願寺御歎堂御為守藏之
事丁為汀茶者也先年江

書之猶為後代書置之儀

い方於遠宵嘗在之未堅丁加

成敗者やの譲状如件

天正十五丁曆極月廿六日先佐丹

汀茶小三

7

顕如宗主譲状写

「顕如上人譲状写」一巻の内

一通
江戸時代初期
縦三三〇×横四八・五cm
〔請求記号〇二・一六三二一〕

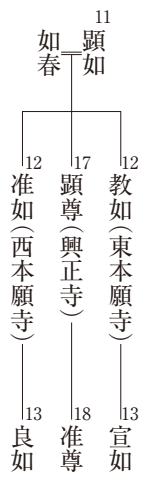
顕如宗主（一五四三〜一五九二）は、父が本願寺第一〇代証如宗主、母が庭田重親の娘顕能で、童名を茶々と称した。時代は戦国末期、統一政権を目指す織田信長と戦った、通称「石山合戦」を戦い抜いた宗主である。

本願寺は覚信以来、譲状により継職を行うことが慣例となっていた。本譲状は顕如宗主が没する五年前に記された日付を持つが、本譲状が公表されたのは、宗主が没して、長男教如が宗主となり一年を過ぎようとした文禄二年（一五九三）閏九月であった。それも本譲状の宛所「阿茶」は顕如宗主三男准如であったのである（系図参照）。

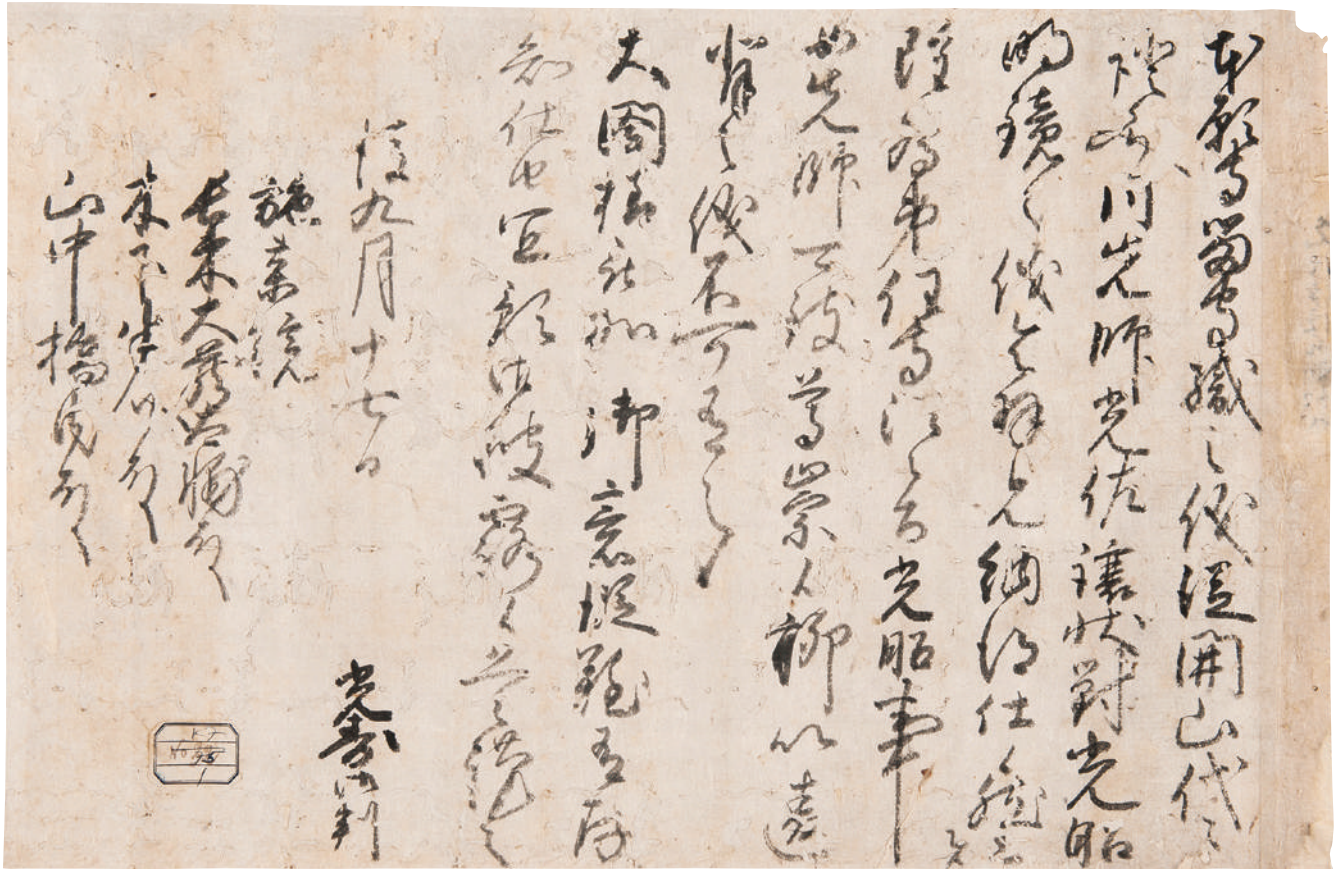
この存在を公表したのは教如宗主の実母如春であった。譲状の存在は豊臣秀吉に報告され、秀吉は教如宗主や如春、坊官下間氏などを大坂城に召喚して、同状に基づき継職有無の諮問を行ったのである。

結果、教如宗主は即時隠居、本譲状を遵守して三男准如の本願寺継職が決定した。しかし譲状の公開が教如宗主継職一年後であり、また同道していた坊官などもそのような譲状の存在を知らないと、秀吉に主張したところから、譲状自体偽文書であるとの噂もささやかれたのであった。

この代替わり事件が、やがて本願寺が東西に分派するという事態を招くとは、この時誰も知る由もなかったのである。いずれにしても、このように秀吉の裁決による宗主の代替わりという、前例のない教団の大事変であったこともあり、教団にはかなりの動揺が生じたのであった。



* 番号は各派歴代順



8

教如前宗主請書写
きょうにょ ぜんしゅうしゅうがきうつし

〔先信浄院礼納後状写し〕 一卷の内

9

准如宗主請書写
じゆんにょしゅうしゅうがきうつし

〔准如上人讓状〕 一卷の内

江戸時代初期

縦三三・〇×横四六・二 cm

縦三三・〇×横四七・五 cm

〔請求記号〇二二・二一六三二一〕

本願寺の職に代りて

代りて承りて又曰先師

先師任讓状に旨記付申候

字又跡形あり請ふ下存候

禮と先師の如先師世の時

来候ふてお遣し方直前出候

ありて候

は五月十日

長生
蓋

施主院

長生大親大補方

木下大膳方

山中大膳方

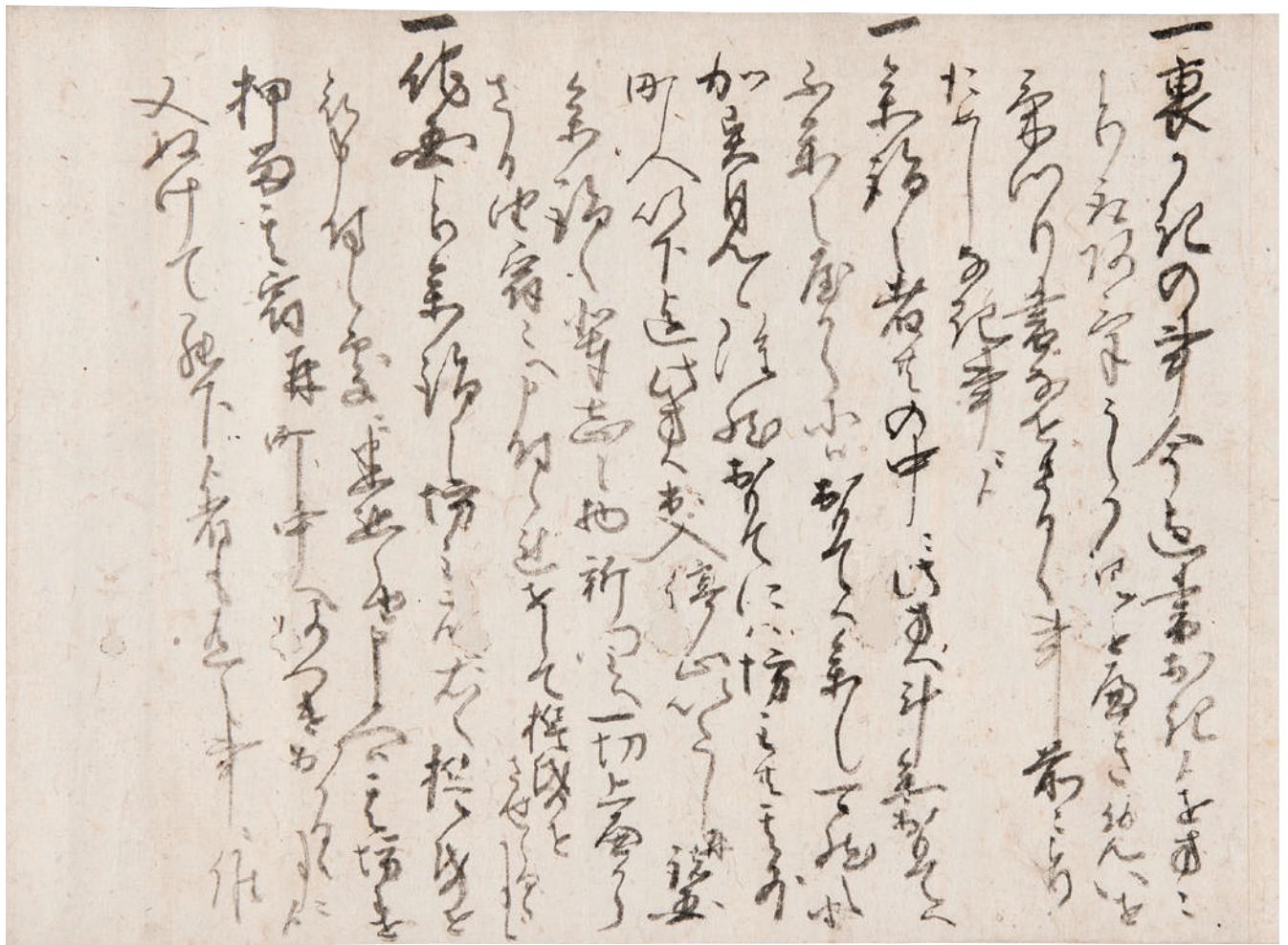
KF
90
1

教如宗主はいったん本願寺を継職したが、母如春が本願寺を三男准如に譲与する旨の顯如宗主讓状を豊臣秀吉に提出したため、秀吉により即座に隠居を命じられた。本願寺は准如が継職し、教如宗主は隠居の身となり、裏方と称されるようになった。

本文書は、この代替わり時に、教如前宗主と准如新宗主が文禄二年（一五九三）閏九月一七日に、裁定を受け入れる旨を記載した請書である。提出相手は秀吉の重臣である。これを受け、同年一〇月一三日、一六日に、豊臣秀次と秀吉より「本願寺影堂留守職」を讓状の旨に任せ、准如（光昭）への継職を認める旨の判物が発給され、この交代劇は表面上完結したのである。

教如前宗主は「請書」に裁定を「納得」した旨を記しているが、決して納得してはいなかったのである。事実隠退した身でありながら、本願寺の当主が行う絵像を授与するなど、「御本寺同前之御様体」の振る舞いを取り続けたのであった。

このような事態は教団を大きく動揺させた。依然前宗主を支持する者も多く、ついに准如宗主は、門末の誓詞提出を断行するのであった。



10

准如宗主代替わりに付

教如前宗主裏書・申物等覚書

〔夏のおふみの事〕 一巻の内

一通

江戸時代初期

縦二九七×横三九〇cm

〔請求記号〕O三・一一二六―

豊臣秀吉の裁決による宗主の代替わりという、前例のない教団の大事変であったこともあり、教団は大きく動揺した。本文書は代替わりの水面下の経緯を伝えている貴重なものである。おそらく教如前宗主の手によるものか、そうでなければ、その側近であろう。

上洛してくる「参詣之者共」の中には「此方」(教如)へ「計参」り、「おもて」(准如)へ「不参」の「やから」(輩)があつたという。

教如宗主は隠退させられたが、このように支持が多かった。この事態に准如宗主は危機を感じ、ついに本願寺へ従順することを約させた誓詞(代替わり誓詞)の提出を、門末に命じた。本文書ではその実施を次のように記している。

「おもて」は、「坊主共、其外町人」に至るまで、「此方」(教如)へ出入停止をし、「新門主」に「志、申物」を「一切上へから」ざること、「宿々へ申付」けたという。「他国より参詣之坊主衆」が、申し付けられた「誓紙を」「迷惑之由申候へば、其坊主をお留、其宿並町中へ」預け置いたことや、その預け置かれた者の中には「ぬけまかりくだ」つた者もいるなど、かなり強制的であった。

これら誓詞の提出にもかかわらず、やがて教如前宗主は徳川家康に接近し、慶長七年(一六〇二)家康より現在の寺地を受け、そして翌慶長八年群馬妙安寺より親鸞木像を得て、事実上、本願寺を別立することになる。いわゆる東本願寺の成立である。この別立により本願寺教団は、准如系(西本願寺)と教如系(東本願寺)に分派する。

11

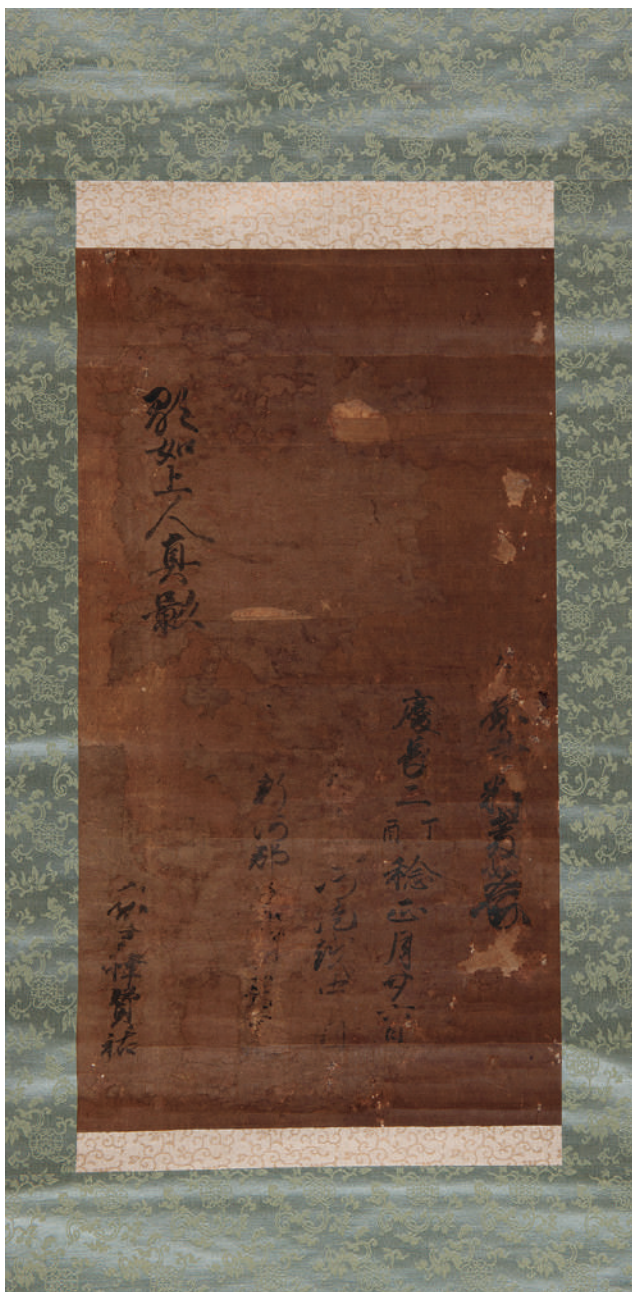
顕如宗主御影裏書

一軸

慶長二年正月二十六日

縦五五・五×横三〇・三三

〔請求記号〇三三・一一五四一〕



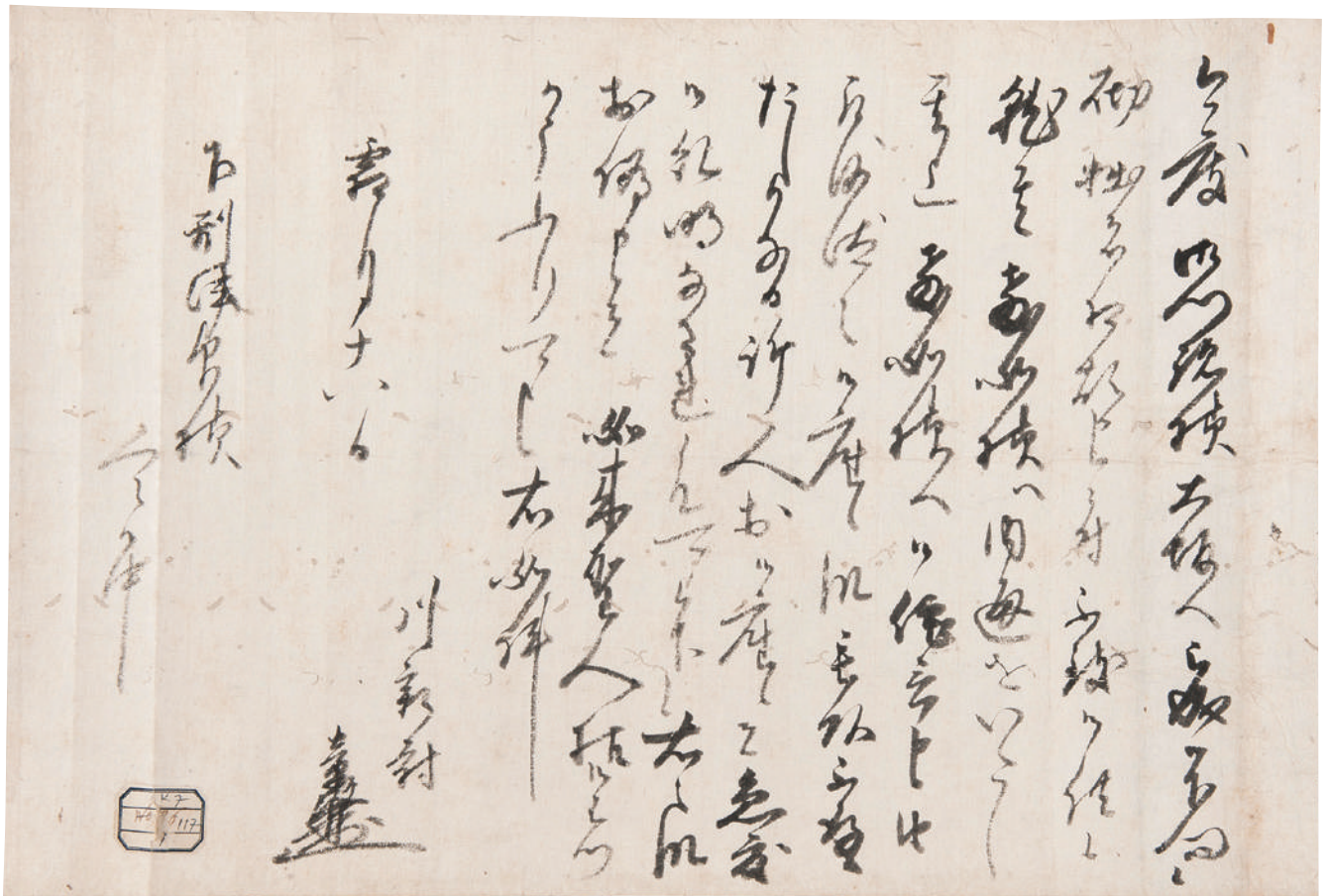
本軸は教如前宗主が慶長二年（一五九七）正月二十六日に願主越中国賢祐へ授与した「顕如宗主御影」の「裏書」である。本願寺では、御影を各地寺院や僧侶に授与する際、時の宗主が御影表具の裏に貼付する証明書を裏書と称した。裏書には、通常、授与した宗主名、授与を願った願主名、授与年時、願主の所在（地名）が記される。

御影授与・裏書貼付は本願寺宗主の権限であるが、今に本裏書のみが伝来するのはどうしてだろうか。本裏書から考えられるのは、第一に隠退状況下で教如前宗主が「顕如宗主御影」（本裏書を貼付して）を授与していた事実である。ここから教如前宗主は隠退したものの、依然として本願寺当主と同様の活動をしていたことがわかる。これが代替わり誓詞に記されている「御本寺同前之御様体」をいうのであろう。

やがて慶長七年（一六〇二）に教如前宗主は徳川家康の助力を得て東本願寺を建立し、宗主に返り咲くのである。当然この御影を授与された側（寺院・僧侶など）は教如前宗主支持者であり、分派と同時に東本願寺の傘下に入ったであろう。これが第二点。

第三にはその当該寺院ないし僧侶（その子孫）が、後年、西本願寺側に帰参したであろう点である。その時、西本願寺は教如前宗主が授与した本御影を提出させ、元の裏書ははずし、時の西本願寺宗主の裏書を新たに貼付して、本来の持ち主へ授与し直したと思われる点である。これを「申替」という。

したがって本裏書は上記のプロセスではずされ再度表具されたものが、現在に伝来したと考えられるのである。



12

川那部新尉誓詞

〔下間刑部卿請文〕 一卷の内

一通

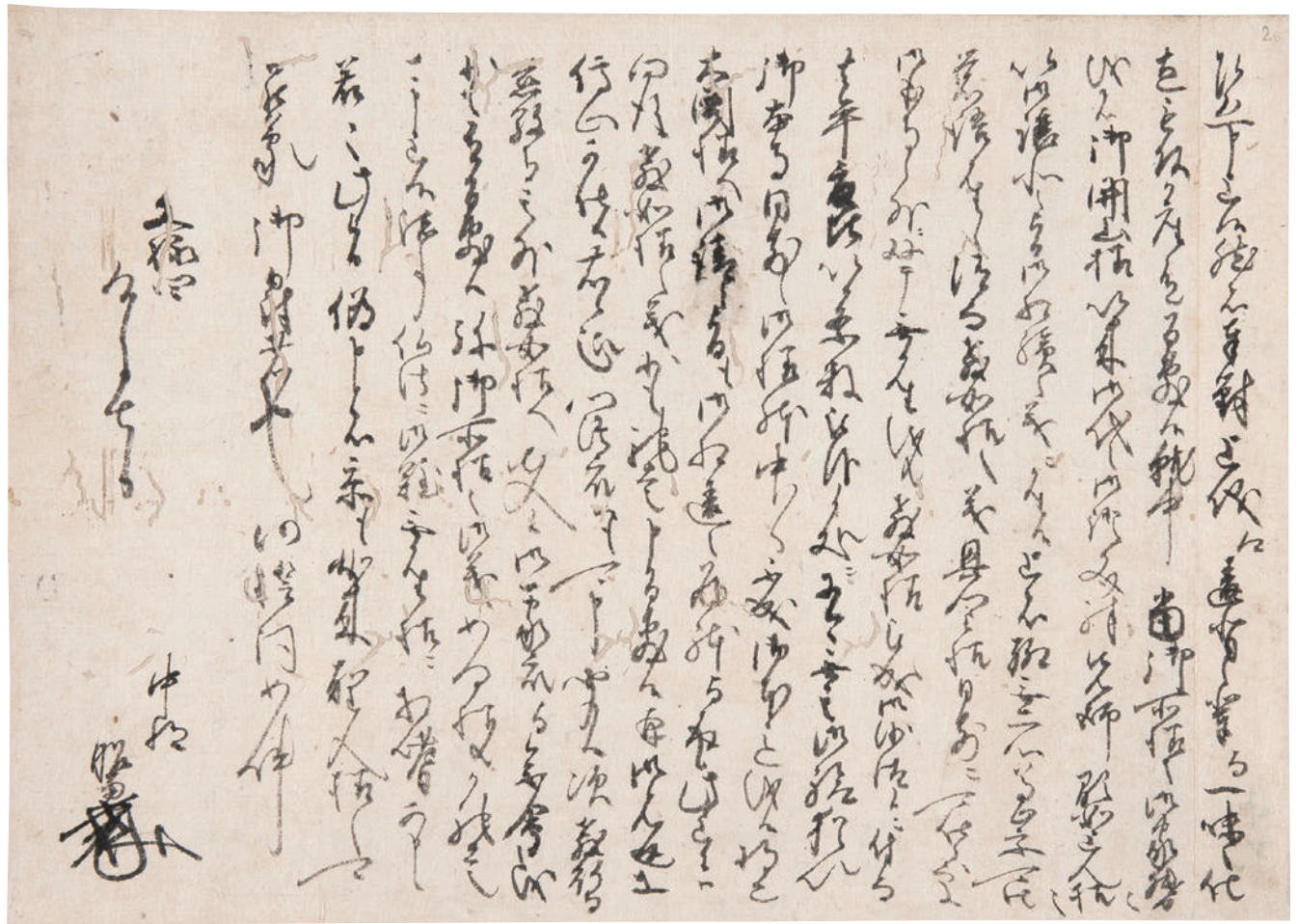
(年不詳) 一月十八日

縦三〇・八×横四五・四cm

(請求記号〇二二一六七二)

本文書は、一月十八日に、本願寺家臣「川新尉(川那部新尉)が、坊官下間頼廉に提出した誓詞である。ここには准如宗主が大坂御坊(後の津村別院)へ下向した時、川那部が煩いのため、同行しなかったことを、隠居した教如前宗主に内通しているのではないかとの嫌疑をかけた、「毛頭不存」として疑念を晴らすために誓詞を提出したことが記されている。

本文書は仲間内で教如前宗主への内通者がいるという疑心暗鬼に陥る教団内の混乱ぶりをよく示しており、前宗主の隠退劇の衝撃を物語っている。



13

中将昭恵(常楽寺准賢)誓詞
 「文禄書札」 一卷の内)

一通

文禄四年九月七日

縦二九・五×横四一・三cm

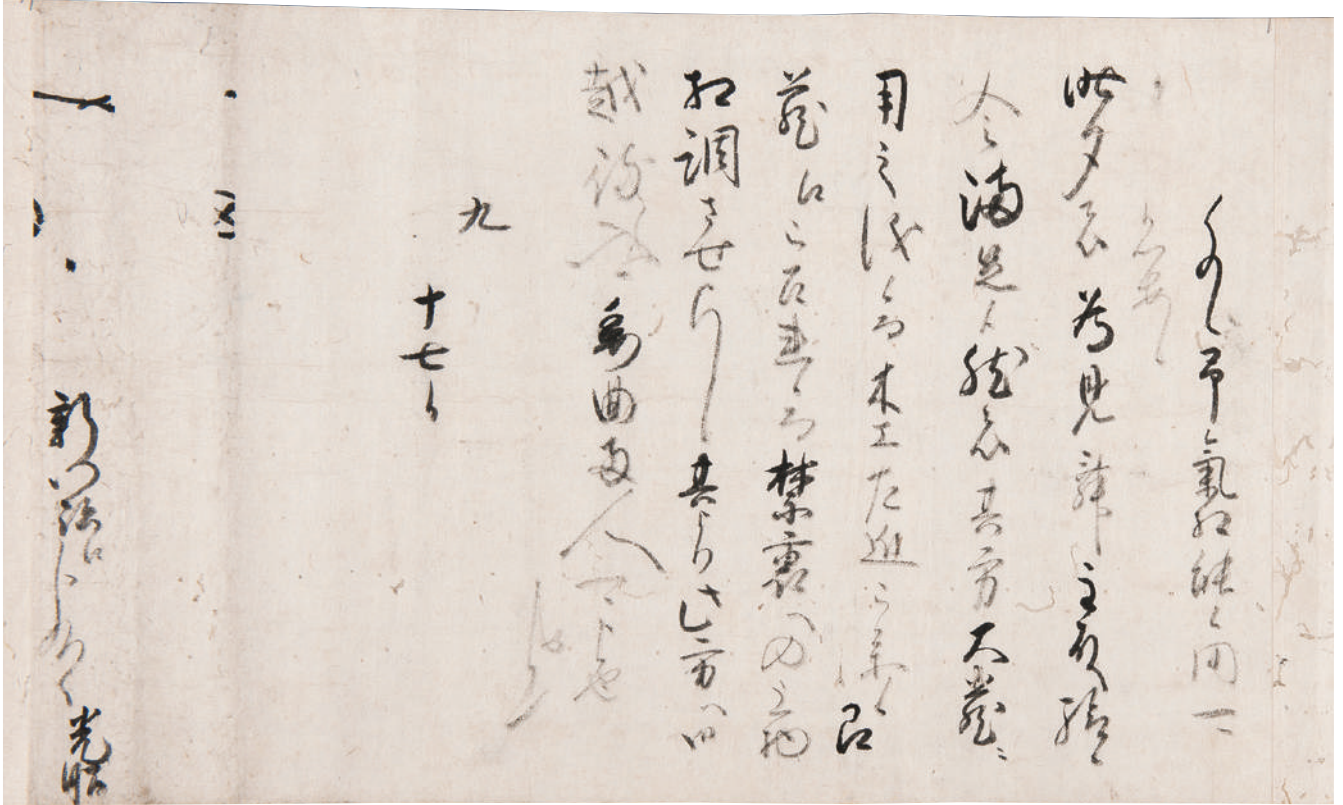
〔請求記号〇二二・一五一一三〕

教如宗主が豊臣秀吉により隠居させられ、三男准如が本願寺を継職した。この代替わりによる教団の動揺は甚だしく、依然、教如前宗主に心を寄せる者も多かった。

准如宗主は教団の分裂をさけるため、教如前宗主に従わない旨の誓約書＝誓詞を作成させ提出させた。これらの誓詞は「代替わり誓詞」と通称されている。この誓詞を収録した巻子を「文禄書札」と呼んでいる。全三巻、五九通の誓詞が収録されている。なお「書札」とあるが、手紙ではなく誓詞である。

「誓詞」とは一般的に「起請文」のことである。起請文とは「宣誓書」の一種で宣誓の内容は絶対に間違いない、もしそれが誤りであったならばすなわち宣誓が破られた場合には、神仏などの呪術的な力によって、自分は罰を受けるであろうという意味の文言を付した宣誓書である。その構成は、前半の約束確言部分である前書と、後半の神仏勧請・呪詛部分である神文(罰文)となつている。戦国期には様式も完成し、その勧請する神仏も何十何百という数となる。

本文書は文禄四年(一五九五)九月七日中将昭恵の誓詞である。顕如宗主讓状により家督は准如宗主が正式に継いだこと、教如前宗主には参会もしないことなどを誓約している。これ以外の誓詞もおおよそ同様の内容となっている。なお本文書の場合は「如来聖人様之可能蒙御罰者也」が罰文にあたる。如来聖人の罰を受けるという罰文は、本願寺の誓詞の特徴である。



14

准如宗主自筆消息
 (「准如上人御書」一巻の内)

一通
 江戸時代初期
 縦三三・八×横五二・五cm
 (請求記号〇二・二一五〇一)

この一巻は、准如宗主が良如新門主へ宛てた消息(手紙)五通を収録する。これらはすべてプライベートのことが記されており、親から子への私信である。したがって収録消息はすべて准如宗主の自筆と考えられる。本文書は年未詳だが、九月一七日に体調を見舞ってくれた良如新門主に、准如宗主がそのお礼を述べ、次いで禁裏への上納物の調整を依頼したものである。なお、文書左端上部の〇に×の封じ目は珍しく、准如宗主のくせといえるかもしれない。

第十宗主證如諱光教童名光仙九後改光養九寶
 宗主孫圓如第二子母藤原氏永正十三年十一月
 二十日生以圓如早世寶宗主立為法嗣大永五年
 寶宗主寂時僅十歲七年四月二日於青蓮院薨度
 以尊鎮親王為師為九條前關白尚經公猶子攝家
 權輿遂是時下間賴秀及賴盛下間賴玄長子賴秀
 賴盛攝備中守兄弟共專寺政宗主已幼弱葉世亂
 有攻取志兄弟至加賀橋宗主命諷門徒與兵不果
 而亡顯哲記言起勝寺寶顯下間賴秀及賴盛共作
 不義公武憤深詣圓如劊者蓋謂此也一云筑
 前兄弟後又賴秀賴天文元年八月廿四日江州
 盛共作不義未詳孰正

六角定賴觀音寺山城主後
 包織細繪綾所成共京師日蓮堂攻山科
 焚燬殿堂願行寺勝忍勝慧下間賴益及融慶等戰
 死一云下間筑前守下間源十郎兼權有隆源十郎
 拓引外庭自故火攻逐源山科宗下間系諸賴
 秀賴筑前法橋盛源孫基賴賴永季子賴包賴包季
 賴慶並攝源中郎末詳孰是二高賴包也賴包永正
 十五年二月二日廿七歲而卒則年時指違可疑明
 史記云江州宗徒怒定賴滅山科而焚盡六角家諸
 士家以宗主時十七歲奉祖像遷大坂別院歛其來
 報之宗主時十七歲奉祖像遷大坂別院歛其來
 追宗徒數人防戰死之二年五月日蓮堂誘諸兵家
 一云木澤左京亮攻大坂數月不克而退斯時紀州雜賀宗
 徒等特有勳勞云明順記云蝦細川元澄南北諸武
 士日夜攻大坂兩年明誓招命德
 之既而由三好木澤佐佐木等策和議成而冠悉去

15 大谷本願寺通記

一一冊(他) 玄智著 江戸時代後期自筆
 縦二七・四×横九・四cm(等)
 (請求記号〇三二二八一二)

本書は、本願寺派の歴世宗主伝、旁附法胃伝、旁附略伝、諸弟諸伝、近世学侶伝、殿堂宮構、別院縁由、法事諸式などの一二部で構成される、当時の真宗史を集大成したものである(『真宗全書』卷六八所収)。天明四(一七八四)年閏正月二二日に法如上人の命を受けた玄智(一七三四-一七九四)が著した。玄智は、本書の他に『考信録』『非正統伝』などを著した、本願寺派における歴史の大家であると同時に、『教行信証光融録』(四〇巻、『真宗全書』卷二四・二五所収)など、現在でも参照されるべき多くの教学書を遺した人物である。

今回展示するものは自筆草稿本であり、『真宗全書』所収本の底本として用いられている。法如上人の項の一〇頁分(三月映姫)から「頌歌」までなど、他の伝写本に見られない部分もある。その筆致などから、本書にかける玄智の情熱が感じられる。

ソモ、當國攝州東成ノ郡生王ノ庄内
 大坂トイフ在所ハ往古ヨリイカナル
 東ノアリケルニヤサヌル明應第五ノ
 秋下旬ノヨロヨリカリソヌナカラコノ
 在所ヲミソメシヨリヌチニカウノコ
 トノ一字ノ坊舎ヲ達立セシメ當
 年ハハヤステニ三年ノ星霜ヲ分

儀モナクコシ見カラヌカクノコトキ
 心中ニテハ今度ノ報土ノ往生モ己不
 可ナリアラク勝事ヤツ、フカク、
 ロラニツメテ思案アルニイコトニモテ
 人間ハイルイキハイルイタヌナニナリ
 アルカク由新ナク佛法ヲコソニイ

文明六年二月十六日早朝ニ俄深
 筆畢而三

五帖本

16

御文章

一冊 本願寺第九代宗主実如証判 室町中期写
 縦二七・三×横二一・八cm
 (請求記号〇二一六一九一)

「御文(御文章)」は、本願寺第八代宗主蓮如が門徒の伝道教化のため
 に、真宗の教義を平易な言葉で書き記したものである。第九代宗主実如
 の時代になっても、伝道教化の中心に据えられ、巻尾に実如の自署と花
 押が置かれた実如証判本が制作された。また、実如自身、各地に散在す
 る「御文」を蒐集し、そこから特に肝要な五帖八〇通を抜き出した「五
 帖本」を制作している。
 今回展示の実如証判本は、二二通の「御文」が収録されており、比較
 的若い頃の花押の形態であることから、「五帖本」を制作する以前に作
 られたものであることが分かる。未詳の部分が多い「五帖本」制作過程
 を研究する上で、価値の高い資料である。



17

正依修多羅獅子吼図

三幅 巨勢金起画 三条実美讚 明治時代写
 縦二〇・七×横七・四cm
 (請求記号〇二・一〇〇三)

釈尊が浄土三部経を説法している図を曼荼羅風に描いたもので、右から大無量寿経説法図、観無量寿経説法図、阿弥陀経説法図の三幅から成り、上部にそれぞれ経文の讚名が書かれている。讚は明治政府の重鎮三条実美(一八三七〜一八九二)の筆。彼は本願寺第二二代宗主明如上人と親交があったようである。画家の巨勢金起の経歴等は詳らかではない。



18

地獄極楽絵図

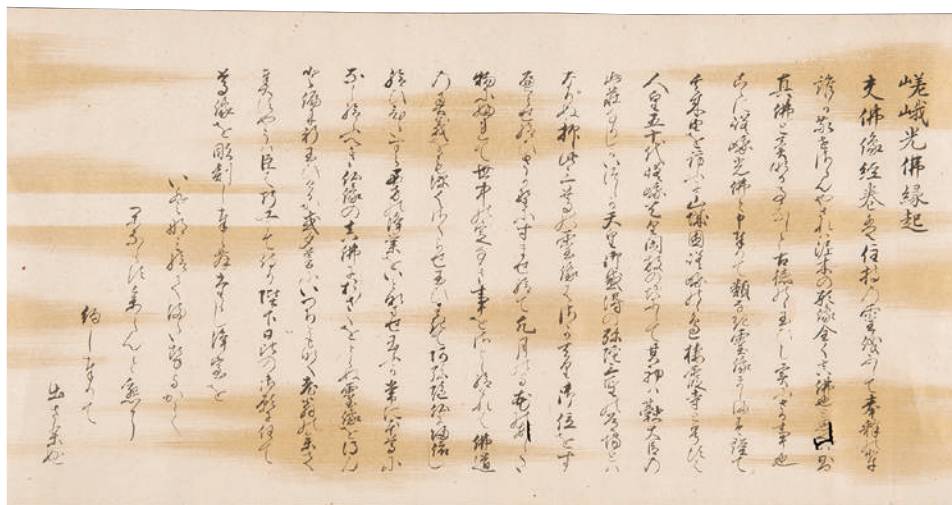
江戸後期、明治初年印

紙本二幅（本紙寸法 縦二二七・三×横五八・五cm）

（請求記号〇二・一八四―二）

日本の浄土教を代表すべき名著として現在なお広く一般に知られている『往生要集』は、漢文で書かれた仏教書である。江戸時代前期からは、仮名草子のような絵入りの平仮名本が刊行され、一般庶民にも親しまれるようになった。

『地獄極楽絵図』は、絵入りの平仮名本『往生要集』の挿絵の版木を利用して、江戸時代後期から明治時代にかけて製作された掛軸である。挿絵により地獄と極楽を分かりやすく説くことによって、文字を知らない大人や幼い子どもを対象に、浄土教の教えを広めようとした役割があったと考えられる。



19 嵯峨光仏縁起

一巻 江戸時代後期写 縦二七・七×横八四六・〇cm
 (請求記号〇二・二一〇四一)

この縁起絵巻一巻は、江戸後期に書写されたもので、巻末に江戸の釈海雲の識語がある。内容は嵯峨の寺院に安置された釈迦三尊像及び阿弥陀三尊像の縁起を絵巻物にしたものである。絵は五図あり、金泥彩色の精写画である。料紙は金霞引の美しい料紙を用いた卷子本である。

当該の「嵯峨光仏縁起」は近世後期の写本ではあるが、国書総目録には宮内庁書陵部の池底叢書に一本写本があることが報告されているのみである。その点で当該書は希少価値の高い縁起絵巻として貴重である。保存状態も良好である。



20
十卷抄

一〇帖 挿絵一四二図 恵什撰 元禄一五年(一七〇二)写
 縦二九・九×横一三・八cm
 (請求記号〇三二七四三一〇)

別名『圖像抄(鈔)』、『恵什鈔』、『十卷圖像鈔』とも呼ばれている真言系の書。恵什撰。永巖(一〇七五〜一一五二)撰とする説もあるが、永巖が恵什に命じ作らせたともいわれている。全一〇帖で構成され、内容は金剛界五仏から諸天までの諸尊の圖像一二〇図をあげてそれを解説したものである。本書は般舟三昧院旧蔵のもので、奥書などから延慶二〜三年(一一三〇九〜一一三二〇)仁和寺印元書写の高野山真別処・円通寺本をもとに元禄一五年(一七〇二)に作られた写本と思われる。保存状態は極めて良い。



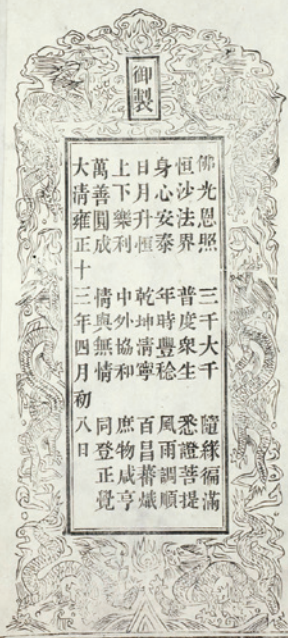
此九字曼荼羅源出五輪門中九字門其九
 字門曼摩伽菩薩因位發四十八願即是教
 風出九字門九字貝足即云九字自此九字
 出九字曼荼羅從是出一百十三字真言即
 是九字曼荼羅尼問此陀羅尼句義何知
 大梵本句義曰
 月此工瓦不水也
飯命頂禮三身三寶
 度我眼依敬等義

21

五輪九字明秘密積

一冊 覺鑿撰 木活字本 古版
 縦二五・二×横一五・九cm
 (請求記号〇三二八五一一)

新義真言宗の祖師覺鑿(興教大師 一〇九五―一二四四)の著作で、真言宗と浄土宗の融会を説いた新説とみられるもので、聖道門より浄土門に移る架け橋ともみることが出来る。五輪とは大日如來の三昧耶曼陀羅である地水火風空のことで、九字とは阿彌陀如來の真言である。この五輪と九字は同一体なりということ説いたものである。どこの地方で刊行されたかは明確ではないが、体裁などから考えると高野版の系統に属しているといえる。



大般若波羅蜜多經卷第一

唐三藏法師玄奘奉詔譯

初分緣起品第一之一

如是我聞一時薄伽梵住王舍城鷲峯山頂
 與大苾芻衆千二百五十人俱皆阿羅漢諸
 漏已盡無復煩惱得真自在心善解脫慧善
 解脫如調慧馬亦如大龍已作所作已辦所
 辦棄諸重擔逮得已利盡諸有結正知解脫
 至心自在第一究竟除阿難陀獨居學地得
 預流果大迦葉波而為上首復有五百苾芻

22

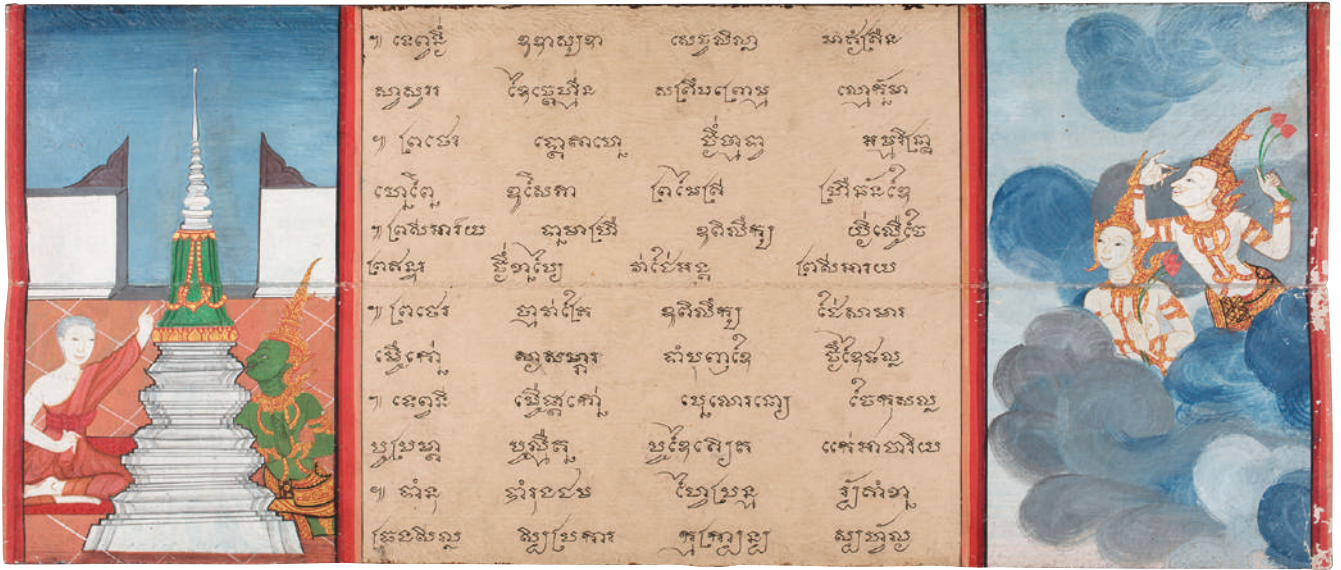
大清三藏(龍藏)

七八三八卷 清代 摺本
 縱三・四cm
 (請求記号二〇三八―七八三八)

清版の大蔵経である。黄色絹原表紙で、用紙は白紙。五行一七字詰。上下单辺。文字は雄渾であり、巻頭には仏説法の図を附している。

清の雍正十三年(一七三五)より乾隆三年(一七三八)まで、四年間をかけて出版された勅版で、明の永楽年間に刊行された梵筈本の北蔵経を底本としている。内容は七八三八巻を有するものである。

明治三二年(一八九九)一月に、本願寺第二二代宗主鏡如上人(大谷光瑞師)は清国巡遊の途につき、四月二三日に清朝の王宮を訪れた。その年の一二月、清朝の答札として、西太后より大蔵経四箱等を贈与された。このときの大蔵経が龍蔵本であり、後に本学に下附された。



23 サムット・コーイ

一帖 タイ一九世紀頃 写本
 縦一四・〇×横六六・五×高さ九・〇cm
 (請求記号〇三・五五一一)

サムット・コーイは、タイ王国で二〇世紀初頭まで作成された大型の紙折写本である。桑科の植物から作った厚手の紙であるコーイ紙で作成されたので、サムット・コーイと呼ばれる。美しい絵画装飾を施した読誦儀礼用の数種のテキストをコム文字(クメール文字)で記しており、美術的な価値の高さから、欧米をはじめとする図書館等に所蔵されている。大宮図書館所蔵本は、漆塗りの表紙に、挿絵一八点を有した装丁で、内容は前半部分がパリー三蔵の要約、後半部分がプラ・マーライ(マーライ長老の他界めぐりの物語)である。使用言語はパリー語・コム語、使用文字はコム文字である。

24 論語集解

一〇卷四冊（魏）何晏集解 正平一九（二六四）年刊、元龜三（一五七二）年加
年加
縦二六・五×横二〇・八cm
（請求記号〇二一九一四 写字台文庫）

中国の何晏（生年不明〜二四九）による『論語』の注釈書で、一〇巻で構成される。完全な『論語』の注釈書としては現存最古のものである。朱熹（一一三〇〜一二〇〇）の註釈を新注と呼ぶのに対して古注と呼ばれ、朱熹以前の解釈を知るための最善の書とされる。漢から魏までの八家の説を集めて、自らの解釈を加えている。日本では古くから書写されており、正平一九年（二三四）の刊本が現存最古のものとされる。

今回展示するものは、正平版とされる無刊記本で、奥書に「応下間筑後法橋威命拭洪眼／染禿筆以累家秘本加朱墨点勿／令外見而已／元龜第三歳舍壬申孟秋二十又八／宮内卿清原朝臣（花押・印）」とあることから、下間筑後法橋（一五一六〜一五七五）の依頼によって、元龜三年（一五七二）に儒者の清原枝賢（一五二〇〜一五九〇）が累家の秘本によって朱点・返り点・右仮名・合符などを付したものであることが知られる。清原枝賢による加點本は、他に例を見ない唯一のものとしてされる。清原枝賢は、証如上人時代に親交の深かった清原宣賢（一四七五〜一五五〇）の孫で、キリシタンの清原マリアの父に当たる人物である。儒学の講義を行う明経博士をつとめ、天正九年（一五八一）には出家したという（法名道白）。

言任諸侯可仲弓問子乘伯子
使治國也

日伯子書子曰可也簡
傳無見焉

仲弓曰居敬而行簡以臨其民不

亦可乎
臨下寬畧則可也

而行簡無乃太簡乎
苞氏曰伯子之簡太簡也

子曰雍之言然哀公問曰弟子孰

為好學孔子對曰有顔回者好學

不遷怒不貳過不幸短命死矣今

也則亡未聞好學者也
凡人任情喜怒違理

顔淵任道怒不過分遷者移也怒當其理不移易也不貳過者有不

善味也子華使於齊冉子為其母

請粟子曰與之釜
馮驩曰子華弟上子公西華赤字

文久二年龍集壬戌八月入藏



有護雷震
參事鳳雲

舊約全書卷一

創世記

龍集壬戌八月入藏

太初之時上帝創造天地地乃虛曠淵際晦冥上帝之神照育乎水面上帝曰宜有光即有光上帝視光為善遂判光暗謂光為晝謂暗為夜有夕有朝是乃首日○上帝曰宜有穹蒼使上下之水相隔遂作穹蒼而上下之水截然中斷有如此也上帝謂穹蒼為天有夕有朝是乃二日○上帝曰天下諸水宜滙一區使陸地顯露有如此也謂陸地為壤謂水滙為海上帝視之為善上帝曰地宜生草蔬結實樹生菓菓懷核各從其類有如此也地遂生草蔬結實樹生菓菓懷核各從其類上帝視之為善有夕有朝是乃三日○上帝曰穹蒼宜輝光眾著以分晝夜以定四時以記年日光麗於天照臨於地有如此也上帝造二獸光大以理晝小以理夜亦造星辰置之穹蒼照臨於地以理晝夜以分明晦上帝視之為善有夕有朝是乃四日○上帝曰水必滋生生物鱗蟲畢具鳥飛於地戾於穹蒼遂造巨魚暨水中所滋生之物鱗蟲畢具羽族各從其類上帝視之為善視之曰生育眾多充物於海禽鳥繁衍於地有夕有朝是乃五日○上帝曰地宜生物六畜昆蟲走獸各從其類有如此也遂造獸與畜及蟲各從其類視之為善○上帝曰宜造人其像象我儕以治海魚飛鳥六畜昆蟲亦以治理乎地遂造人維有乎已象上帝像造男亦造女且祝之曰生育眾多昌熾於地

創世記

第一章

25

新舊約全書

一冊 安政二年(一八五五) 縦二〇・一×横一三・五cm
(請求記号〇三二四九四一)

学林において早くから外学興隆の気運が高まり、明治元年(一八六八)に暦学・国学・儒学・破邪学などの新しい学科が設置されたが、それより前、文久元年(一八六一)五月に学林より本山に対して基督教の流伝について建白書が提出された。文久二年六月二三日の「学林万檢」には「新・旧両聖書」を購入することが本山と学林との間に行われた事が記されている。それが、この本である。

表紙裏に「文久二年龍集壬戌八月入藏看護雷震參事鳳雲」とある。「旧約」は「耶蘇降世千八百五十九年」。「新約」は「耶蘇降世壹千捌伯五拾五年」(江蘇松江上海墨海書館印)と刊記がある。



26

古蘭天經

一冊 年代不明 写本 縦三二・〇×横二四・四cm
 (請求記号〇二一三七八一)

コーランは、アラビア語で書かれたイスラム教(回教)の根本聖典である。ムハンマドが最初に啓示を受けたときとされる六一〇年から六三二年の二二年間に預言者として、また共同体の政治的指導者として活躍する折々に神から下された啓示を人々が記憶し、後に集録されたものとされる。一一四章からなっているが一貫したストーリーというものはない。本書は昭和一七年(一九四二)七月に当時の赤松智城教授がこの古蘭天経を調査し、全部で二二章が収録されていることを記録されているが、その他の詳細についてはわかっていない。

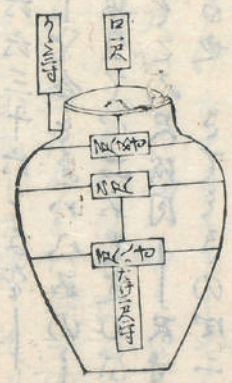
Ⅲ 龍谷蔵の多彩な資料

龍谷蔵には、宗教関係の資料ばかりでなく、それ以外の資料も収められています。たとえば、自然科学や文学、歴史、芸術などの分野の資料です。しかも、いずれも各分野において、学術上貴重な資料として評価されているものばかりです。

また、新たな貴重資料についても、寄贈や購入により、積極的に受入を行ってきました。その姿勢は、昔と変わらず現在も続いており、龍谷蔵は、資料の質と量において、日々歩みを重ねています。

ここでは、数学書や本草書、和歌や物語の資料、絵画、地理書などの漢籍、大谷探検隊将来資料などを紹介します。昔から現在に至るまでに所蔵された、龍谷蔵の多彩な資料をご覧下さい。

二五のしあゆく見るなり 又六二五よ見る
 しろい十六のこゑよけくけくろちり
 こくの入り三十三石三ろく六合にや
 片のふんととる毒



見き片の分をよりけりくけくろちり
 又くけくろちりくけくろちり

さく右片の分をよりけりくけくろちり
 の次一尺ぬすよ 一尺五寸け二尺二寸ぬ
 ふとるをー 同中の二尺と二二八尺と
 まとる 同中のつき一尺八寸に一八とけ
 三尺二寸ぬふとるをーその七寸を七とけ
 寸九ふとるをーその七寸のふとるを
 ぬすい 九尺九寸八ふあり 八面とけ
 りり一と分をぬすよ 二尺二寸九ふとるを
 めさてさきの面ふ七九とぬすい物のふとるを
 けけぬすい 一九七一のふとるぬすい
 長けの二尺二寸けけぬすい

27 算用記

一卷一冊 著者・刊年不明 木活字版
 縦二五・三×横一八・三cm
 (請求記号〇二一四三六一 写字台文庫)

本書は、写字台文庫(本願寺歴代宗主収集の書籍)の中の一冊として収蔵されている貴重書で、日本人が書いた刊本数学書のうち最古のものとして位置づけられている。一六〇〇年頃のものと考えられるが、刊年も著者名も目下のところ不明である。

日本文化史上、江戸時代前期の和算(日本数学)は、吉田光由の『塵劫記』(寛永四年(一六二七))、関孝和の『発微算法』(延宝二年(一六七四))等の出現により、驚くべき高度な計算法の域に達していたことが知られている。それに比べて、本書は内容の単純さが指摘されているものの、日本数学の祖ともいわれる毛利重能著『割算書』(元和八年(一六二二))のほとんどが本書の内容を受け継いでいることから、その先駆的重要性が確認できる。なお、下平和夫氏監修『江戸初期和算選書』第一巻二(研成社一九九〇年)として、佐藤健一氏のすぐれた校注により復刻された。

近世初頭における貴重な和算書が、ほかでもなく本願寺歴代宗主の蔵書中に収蔵されていたことも注目に値する。



法ほりきりきりのりを四角しやうかくありて
 又またきりきりありて下したはきりきり
 小石こいしよりよりりしてきりきりさけて
 かかきりきりありてありてありてありて
 又またきりきりありてありて
 ままけけんんざざををううららりりててみるみる
 又またきりきりありてありて
 又またきりきりありてありて



28

新編塵劫記

一冊 吉田光由編著 寛永四年(一六二七)刊
 縦二六〇×横一八・二cm
 (請求記号〇三二五四九一〇)

本書は、江戸時代初期の算学者吉田光由(一五九八〜一六七三)の著作で、和算書の中で最も知られている存在である。江戸時代初期から頻繁に刊行され、その版種は膨大な数に上る。

内容は、米や布の売買、土地の面積、体積、高さなどの計算例をあげ、なおかつ図解するものである。説明の文章も平易であることから、庶民階層にも広く普及した。その人気は絶大で、初刊まもなく海賊版が横行した。そこで、著者吉田光由は、寛永一二年(一六三四)版の刊行に際し、その一部分を色刷りにして、海賊版と著者自身が関与する版本との差異を明確にした。もちろん、多色刷は当時としては未だに珍しいものであり、海賊版の版元にはマネのできない最先端の技術であった。

吉田光由の外祖父は、豪商として広く知られる角倉了以(一五五四〜一六一四)で、その父兄は貿易に従事するものであったという。また一族の角倉素庵は嵯峨本(慶長年間に刊行された美術的な古活字版で本阿弥光悦も関与する)の刊行に深く関与し、角倉家は近世初期の出版文化と関わりの深い家であった。吉田光由が色刷りに目をつけたのも、こうしたことと無縁ではないとされている。



29

紹興校定經史証類

備急本草

二四冊 (宋)王繼先等校 宋 紹興二十九年(一一五九)上進 江戸後期写

縦二六・五×横一八・八cm

(請求記号〇二一五四三二四 写字台文庫)

本書は、宋代の王繼先(？)一八一)らによる薬物書である。その成立・刊行・伝承には不詳な点が多々あるが、一般には次のように考えられている。

紹興二十七年(一一五七)に王繼先が校上した『大観本草』が国子監から刊行され、ついで継先らは詔を奉じて同書を再校し、自注も加えて同二十九年(一一五九)に『紹興校定經史証類備急本草』と名づけて進上した。

本書は日本で龍谷大学本二点を含め、計二十七点の所蔵が知られており、大英図書館・台北故宫博物院図書館・北京図書館も各一点を所蔵する。すべて日本写本で、国外へは明治以降に伝えられた。

写字台文庫蔵の当本には六一九葉が載り、うち五一〇葉について計七九二の図がある。後人の手がかなり加えられ、錯簡や誤脱もあるが、絵はよく文も多く、内容が豊富な点では伝写本中の善本とされる。当本は岡西為人氏の解題を付し、昭和四六年(一九七二)に東京・春陽堂より原寸大で影印出版されている。



31 花^か鳥^{ちよう}図^ず

30 瓢^{ひょう}之^の図^ず

各一幅 本如上人画 江戸時代後期
 縦一〇〇〇×横三六〇cm(瓢之図)、縦九二〇×横三四八cm(花鳥図)
 (請求記号〇二四・一一七五十一(瓢之図)、〇二二・一一五八一(花鳥図))

本願寺第一九代宗主本如上人は、大規模な教義論争であった三業惑乱さんごうわくらんに対して、裁断書を発布した事績などが知られている。余技についても明るく、詩歌・茶道・陶芸・雅楽などが知られている。特に絵画への造詣が深く、吉村孝敬に師事し、画家の応挙や呉春などと交遊があったとされている。「瓢之図」「花鳥図」は、いずれも上人が描いたものである。それぞれ本如上人の号「碧山」と記されている。

飲中八仙歌



知章騎馬似乘船
眼花落井水底眠

汝陽三斗
始朝天
道逢麴車
口流涎
恨不移封
向酒泉

左相日興費萬錢
飲如長鯨吸百川
銜杯樂聖稱避賢

32

大谷尊由師書画卷「飲中八仙歌」

一巻 大谷尊由師画 大正一四年(一九二五)作
縦三六・八×横六〇七・〇cm
(請求記号〇二・二一九五―)

大谷尊由師(一八八六―一九三九)は本願寺第二二代宗主である大谷光尊(明如上人)の五男として生まれた。兄は大谷光瑞師。第二二代宗主となった兄光瑞師を助け、本願寺執行長や本願寺派護持会財団理事長などを歴任し、大谷探検隊の支援者のひとりでもあった。光瑞師が宗主の座を退いてからは、政界に進出し、貴族院議員となり、第一次近衛内閣では拓務大臣に就いた。宗教家、政治家として知られる大谷尊由師には、いま一つ、芸術家としての貌があった。心斎と号し、多くの秀作を遺している。

「飲中八仙歌」もその一つであり、大正一四年(一九二五)の作品である。貴族院議員になる三年ほど前にあたる。光瑞師が上海郊外に鉄筋コンクリートの新無憂園を新築し、トルコへの進出を構想していた頃である。「飲中八仙歌」は杜甫の漢詩で『唐詩選』にも入っており、画題としてはよく知られたものであったろうが、師の詩想が窺い知れる作品である。師の芸術活動は本願寺の有する芸術性と無関係ではなく、「本願寺の芸術」を俯瞰するうえでも欠かせないものである。



33

源^{げん}
氏^じ
画^え

三卷 江戸時代後期写 縦三・〇×横各三三八・〇cm
 (請求記号〇二・二一八八―三)

江戸後期写。絹本、卷子装。『源氏物語』の前半部にあたる桐壺巻から蓬生巻まで各帖一場面を描いたもので、一巻五図、三巻で合計一五図である。すやり霞に金箔を散らし、邸内の描写は吹き抜き屋台の技法が用いられ、色彩は濃厚で、繊細な描線で描かれているため、典雅で優艶な色調をたたえた開放感のある絵となっている。筆者の狩野探信(守道一七八五―一八三五)は、鍛冶橋狩野家の第七代で、父探牧の教えを受け、幕府奥絵師も務めている。



34

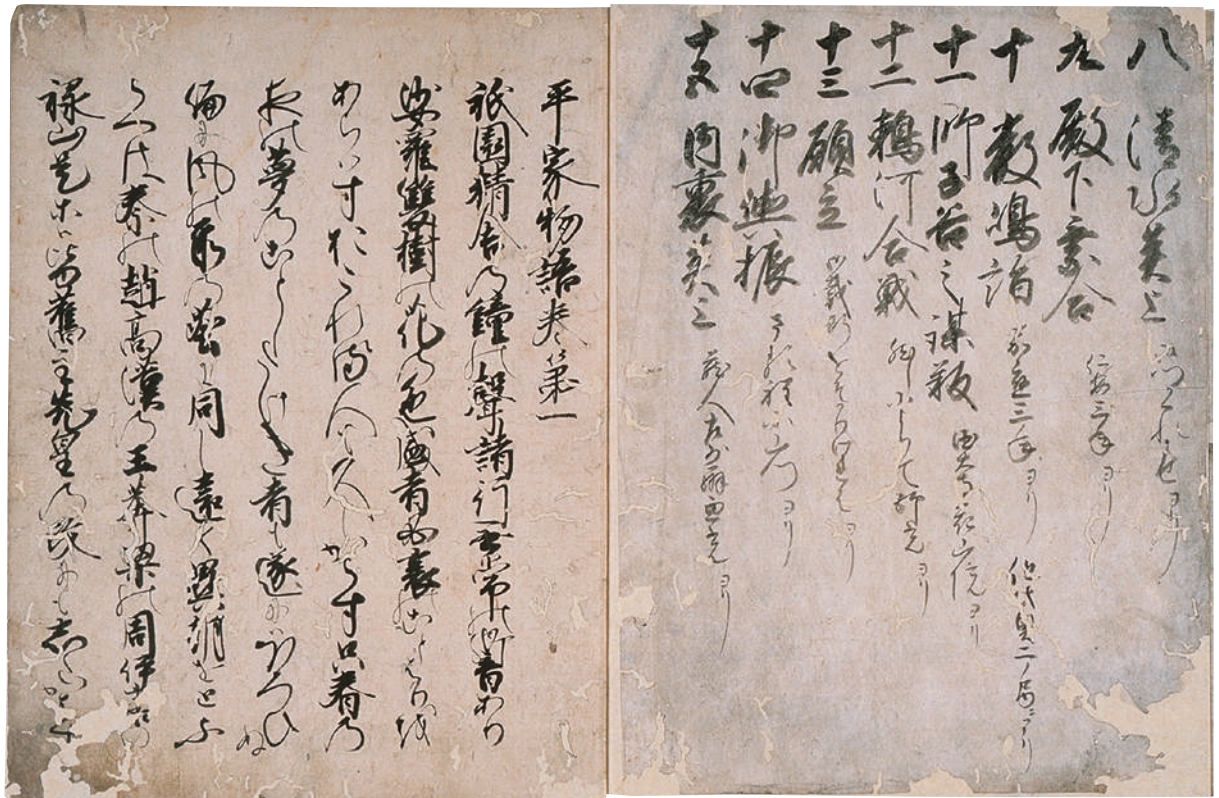
源氏物語絵巻

一巻 土佐光貞画 文化二年（八〇五）写

縦二七・〇×横一三八・五cm

（請求記号〇三二・一〇五―）

紫式部の『源氏物語』を絵巻にしたものである。『源氏物語』の絵画化はおそらく原作成立後まもなく始まり、以降各時代で絵巻・冊子絵・色紙絵・屏風絵などさまざまな形態や表現様式で描かれてきた。本絵巻は、第二一帖「乙女」（一部錯簡があり、「乙女」と「螢」の位置が入れ替わっている）から第五四帖「夢浮橋」までの三四図が描かれてある。土佐光貞（一七三八～一八〇六）は、江戸時代中期・後期の土佐派の画家で、巻末に「文化二年冬日 光貞」と記されている。



35

平家物語がたり

一二冊 室町時代写 縦二八〇×二二・五cm
〔請求記号〇二一三三三二二〕

平家の栄華と没落を描き、「祇園精舎の鐘の声…」の書き出しで知られる『平家物語』は中世前期に成立して以来、広く愛読され、語り継がれてきた日本文学を代表する作品である。後世への影響も大きく、同じジャンルの軍記物語をはじめ諸作品に影響を与えている。

原本はすでにないが、書写された多くの諸本が現存している。大きくは目の琵琶法師が琵琶をかき鳴らしながら語るときの台本となる「語り本系」と、読み物として語り本系よりも分量の多い「読み本系」の二系統に分かれる。さらに語り本系統の諸本は流派の別から、一方流諸本と八坂流諸本とに区別される。

龍谷大学本は、語り本系一方流の覚一本である。覚一本は南北朝期の代表的な琵琶法師・覚一が応安四年（二三七二）、当流の証本として書き遺した伝本であり、奥書に覚一という署名が見える。

なお、龍谷大学本には、同じ覚一本系の高野本（東京大学国語研究室蔵）にある「祇王の巻」と「小宰相の巻」がない。その理由としては、同本が最古の覚一本であり、二つの巻は後から創り出されて付加されたことにあると推測される。

このことから、龍谷大学本は覚一本系のなかでも最も古い写本として重視されてきた。加えて文学的にも完成された伝本と言われ、日本古典文学大系本『平家物語』（岩波書店）の底本として使用されている。



36

三條西公条 さんじょうにしきんえだ
 自筆稿本 じひつこうほん 源氏物語細流抄 げんじものがたりさいりゅうしやう

改装四冊 大永々天文年間(一五二一〜一五三四)成
 縦二四・八×横四七・四cm
 (請求記号〇二一四二一四)

『源氏物語』の注釈書である三條西実隆著『細流抄』は、大永七年(一五二七)から同一〇年の間に成立した。実隆はこの間、また成立以後にも『源氏物語』の講義を行った。その息子公条は、講義を聴聞し、父の説を書き留めた。

本資料は、厳密には『細流抄』そのものではなく、実隆が『細流抄』に基づく講釈を行い、公条がその「聞書」を作成し、さらに公条独自の注記をも付した草稿本である。公条がこの稿本を作成したのは、能登の守護であった畠山義総の求めに応じるためであった。

当該本は『源氏物語』の注釈史を研究する上での重要な資料とされ、伊井春樹『源氏物語注釈史の研究』(一九八〇年)、宮川葉子『三條西実隆と古典学(改訂新版)』(一九九九年)、安藤徹『龍谷大学図書館蔵『源氏細流抄』の研究——「関屋」「絵合」の翻刻と解説——』(『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第四二集、二〇〇三年)等々に詳しく論究されている。また、その紙背に関しては、岡村喜史「畠山義総と『源氏物語』注釈書」(『加能史料研究』第一八号・二〇〇六年)がある。なお、「龍谷大学善本叢書」二五(二〇〇五年)にその影印と翻刻とを収める。



37

奈良絵本 竹取物語たけとりものがたり

三帖 江戸初期写 縦三・二×横一七・三
(請求記号〇二一五七八―三)

本書は、寛文・延宝年間(一六六一―一六八二)頃に作成された奈良絵本で、全体的に保存状態は良好である。本文は一面に一〇行書。挿絵の直前や巻末の一部では本文が散らし書きになっている。挿絵は上が四図、中が四図、下が四図である。挿絵は、半葉(一頁分)のものと同見開き(二頁分)のものと二種類がある。この期の奈良絵本と比べて、しっかりとした構図を持つ。挿絵は濃彩である。詞書部分の料紙にも、金泥で草花などの下絵が描かれている。奥書はない。

本中の挿絵について、龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターで顔料分析を行った結果、絵に使用されている「青色」の中にコバルトを主とした顔料が見つかった。コバルト入りの顔料を取り入れて描くことの最も早い例として注目すべき発見といえよう。



38

奈良絵本 大和物語やまとものがたり

一冊 江戸時代写 縦一七・〇×横二五・四cm
 (請求記号〇二一五九〇一)

『大和物語』は和歌を主とし、恋愛・伝説などを主題とする一七〇余編の物語を収録したもので、宇多朝から村上朝にかけての後宮における歌語りの集成と見られる。この時代は『古今和歌集』が編まれ、『土佐日記』が書かれるなど、和風の文化が隆盛し、「ひらがな」による表現が文学作品としても定着していく時代だった。

表紙は、藍地に金泥で藤の文様、外題は白地に金箔が施された題簽に、「大和物語」とある。表紙見返しは、金・銀箔を散してある。本文中の絵は一六図にのぼり、奈良絵本の『大和物語』としては絵図の多さが特徴である。



40

奈良絵本 長恨歌

三冊 寛文・延宝(一六六一〜一六八一)頃写
 縦一六・五×横二四・三cm
 (請求記号〇二一五八七―三)

「長恨歌」は唐の詩人白樂天による長篇叙事詩で、玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を伝えるものとして広く知られている。日本では平安時代から親しまれ、江戸時代には狩野派の絵師によって豪華な絵巻物が製作されたり、あるいは『長恨歌図抄』(延宝五年(一六七七)跋)のような絵入版本が刊行されたりした。『源氏物語』の桐壺巻は『長恨歌』を翻案した物語ともいわれるなど、日本文学・文化に与えた影響は大きい。

当該本は、寛文・延宝頃に作成された奈良絵本で、上巻の首に「長恨歌」の由来を仮名文で記した序があり、以下詩句を一節ずつあげ、その釈文を添えている。

表紙は紺色地の金泥下絵表紙、題簽は藍色地に金泥下絵をあしらひ、表紙中央に貼られている(原題簽「ちやうこんか上(中・下)」。上巻は、紙数二九丁、挿絵五図(その内、見開きは一図)。中巻は、三三三丁、挿絵五図。下巻は、二八丁、挿絵四図。料紙は間似合紙。

古い時代に「長恨歌」を絵巻や奈良絵本化したものは現在全く伝わっておらず、現存している本はすべて江戸時代に入ってからのもので、その数も極めて少ない。



41

奈良絵巻 武家繁昌

二巻 寛文・延宝(一六六一〜一六八一)頃写

縦三二〇×横二二〇cm(上巻)、縦三二〇×横二七五cm(下巻)

(請求記号〇二・一・二〇三二)

この奈良絵巻二巻は寛文・延宝(一六六一〜一六八一)頃の写本で、大形の長大な卷子本である。絵は上巻に六図、下巻に五図あり、金銀泥極彩色の画で、近世初期に描かれたものでありながら彩色等は劣化もなく、鮮やかである。本文料紙は鳥の子紙で、それに金泥で下絵を描いた上等なものである。本文は仮名主体で書かれ、漢字の部分は横に読みを付している。

本書の内容は文武二道をもって政を行うことが天下を治める要であることを説いたもので、上巻に唐国(中国)の黄帝から高祖に至る武勇について述べ、下巻で本朝(日本)の古代神話から鎌倉幕府源氏三代までの武勇について述べ、武家繁昌の歴史を辿ったものである。

当該の「武家繁昌」は版本がなく、奈良絵巻の卷子本と、奈良絵本の冊子本の形で伝わっている。国書総目録には学習院と大東急文庫及び横山重氏の個人蔵のもの三点が掲載されているが、その数は少なく、写本も寛文より前のものは報告されていない。

当該の卷子本二巻は伝本が少ない上、近世初期の寛文・延宝頃の写本で、しかも大形の堂々としたものであり、絵の状態も良好な点で貴重である。



鐘利権
呂洞窟
祐勢

林和清
元信

42

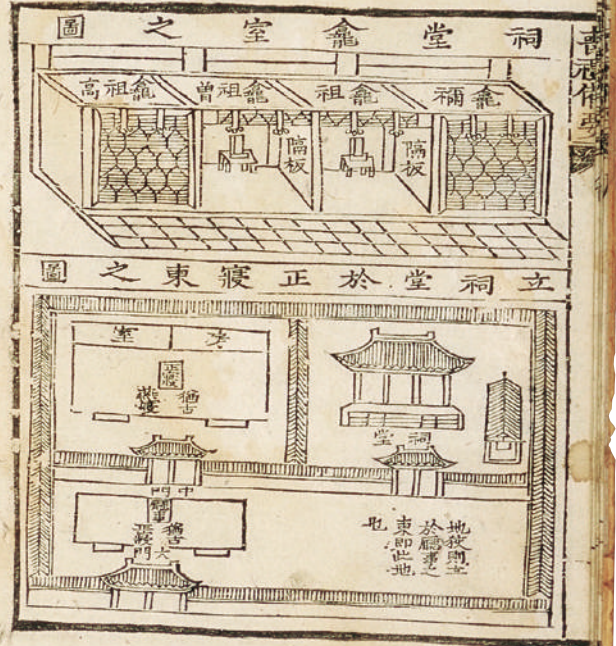
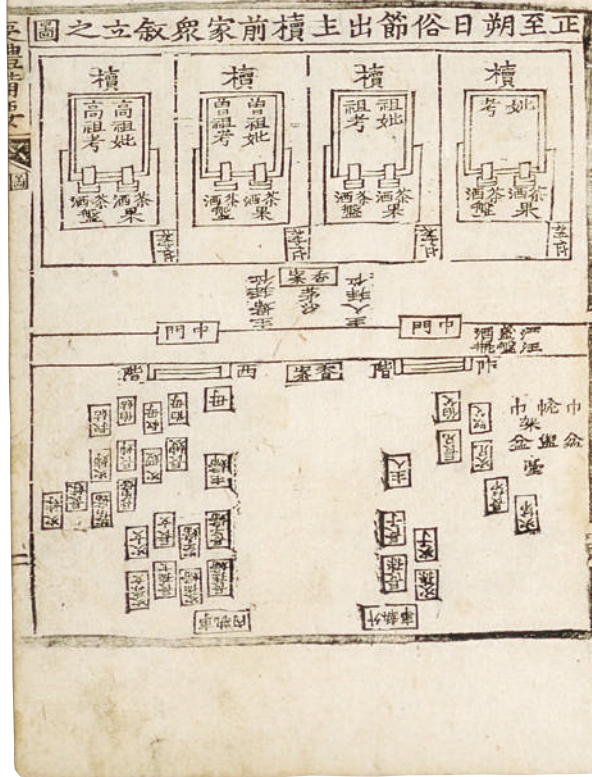
狩野派習画卷

一卷 狩野永納・永敬・永伯筆 近世前・中期頃写 紙本彩色・水墨画
縦二七・五×横九一三・七cm

(請求記号〇三・一一三三二一)

書題簽「永納筆古画家」。二九の絵を集成した図巻。描かれているのは人物・動物が多く、墨画もしくは淡彩の施されたもの。絵に付された印は「永納」「永敬」「永伯」の三種類で、装飾的な独特の表現に定評がある京狩野の三・四・五代目、狩野永納(一六三一〜一六九七)、永敬(一六六二〜一七〇二)、永伯(一六八七〜一七六四)の手になるものと考えられる。

絵は、「人丸」「釈迦」など題が付されたものがほとんどで、題とともに前代の画家の名が記されたものも多い。それらの名は、狩野元信・松栄直信・永徳・孝信・尚信ら狩野派の先達の他、鳥羽僧正覚猷、可翁、如拙、雪舟、長谷川等伯、雲谷等顔などであり、こうした人々の作品を研究のため写したものと考えられる。



43 喪禮備要

二卷 四一巻 (朝鮮)申義慶纂 明崇禎年間刊
 縦三三・七cm×横二二・三cm
 (請求記号〇二一八一二)

李氏朝鮮で著された喪中の礼法についての書である。八行二一字、小字双行、四周单边。黄色押型地紋の原表紙を有する。内容は、中国南宋の儒者である朱熹の『家礼』の本文を主として、古今諸家の説を参考にしながら、初喪から葬祭に至る一切の儀式を記している。また、祠堂、神主、五服喪具、立碑などの図説を巻首に載せている。当時の喪礼の習慣の多くは、『喪礼備要』に拠っていたとされる。



44

新鑄海内奇観 一〇卷(欠卷第三)
 目録一卷 大明一統図譜一卷

一〇冊 (明)楊爾曾撰 明萬曆三十八年(一六一〇)序 武林楊衙衷白堂刊
 縦二六・五×横一六・一cm 每半葉匡郭…縦三・九×横一五・〇cm
 (請求記号〇二一三二一〇 写字台文庫)

『新鑄海内奇観』は、明萬曆期(一五七三～一六二〇)に於ける国内の名山や名勝、旧跡について記した書である。詳しくは、華山をはじめとする五山並びに西山・茅山・黄山などの名山、孔林・西湖・黄鹤楼・赤壁といった名勝・旧跡を収めている。加えて、それぞれの名山、名勝、旧跡には図を附している。

版本については、明萬曆三十七年及び三十八年夷白堂刊本が存在しており、国内では龍谷大学以外に内閣文庫、東京大学東洋文化研究所、大阪府立中之島図書館、東洋文庫、尊経閣文庫が所蔵していることが確認される。

なお、大宮図書館所蔵本については、各図に鮮やかな彩色が施されており、版本自体の貴重さと言うまでもなく、珍しいものであると言える。

増入諸儒議論杜氏通典詳節

四二卷 綱目一卷 図譜一卷

新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節

四二卷 綱目一卷 図譜一卷

一六冊 (唐)李翰序 明刊

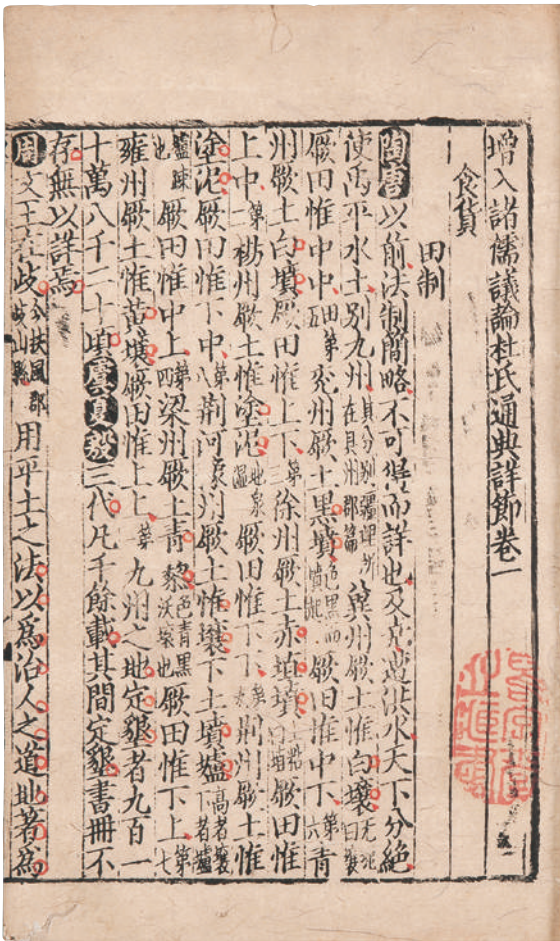
縦二・九×横二・五・五cm 每半葉匡郭：縦一・八・六×横一・三・〇cm

(請求記号〇二一六二一六 写字台文庫)

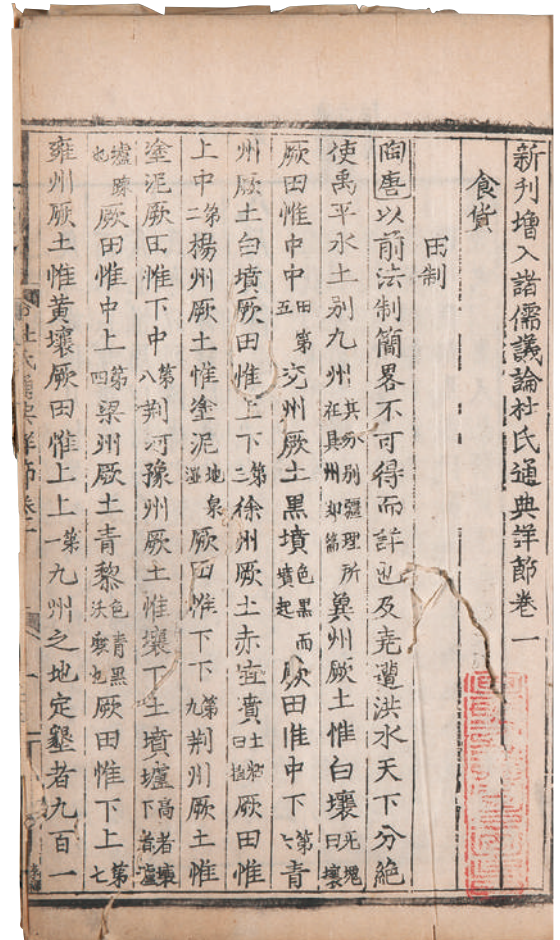
二〇冊 (唐)李翰序 明刊

縦二・七・五×横一・七・〇cm 每半葉匡郭：縦一・三・一×横一・五・八cm

(請求記号五二九三二一八二〇 写字台文庫)



増入諸儒議論杜氏通典詳節



新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節

『杜氏通典詳節』は、唐杜佑撰『通典』二〇〇巻を刪略して四二巻とし、宋代の儒者の論を附した科挙受験の参考書である。撰者は不明であるが、論が収録されている儒者の年代及び避諱欠筆などから南宋の紹熙年間(一一九〇～一一九四)に成立したとされている。

版本は、南宋から元、明初のものが存在していることが確認されているが、冠称によって年代をおおまかに知ることが出来、南宋から元にかけては『新入諸儒議論』、元末から明初は『増入諸儒議論』、『新刊増入諸儒議論』となっている。また、元から明刊本については、至元二三年(一二八六)の刊記があり、南宋の版を元代で覆刻したものが、そのまま流布したものとされる。

国内では、元末明初の版が存在し、『増入諸儒議論』を静嘉堂文庫が、『新刊増入諸儒議論』を内閣文庫及び東京大学東洋文化研究所が所蔵していることが確認される。両者を所蔵しているのは、現在のところ大宮図書館のみである。

古今游名山記卷之十五

峨眉山 四川諸山泉附

括蒼何鐘振卿編輯
廬陵吳炳用晦校正

我昔傳有遊者今不復有路惟大我其高摩霄為佛書所記普賢大士示現之所自郡城西出西門濟燕渡水洄湧甚險此即雅州江其源自雋州邛部合大渡河穿夷界千山以來過渡宿蘇稽鎮過符文鎮兩鎮市井繁遠縣符文出布村婦聚觀於道皆行而績麻無素手者民皆束艾蒿于門然之發烟意者熏拔穢氣以為候迎之禮至我眉縣宿癸巳白縣出西門登山過慈福普安二院白水莊蜀村店十二里龍神堂自是彌谷春宗林樾深小憩華林院過青竹橋我眉新觀路口梅樹壩兩龍堂至中峯院院有普賢閣回環十數峯繞之背倚白崖峯右傍最高而峻挺者曰呼應峯下有茂真尊者庵孫思邈隱我眉時與茂真常相

未歷當不爽也以示友人廬陵吳用晦稍為刪定以命梓人屬學博士余采視刻至乙丑仲春刻成將以求正同好并著余所經游云是編初采柳河東永柳諸記以蘭亭桃源諸名篇為足以存昔賢風票乃友人徐可繩備錄金精衡岱諸作大梁李川父先輩以所著乙巳春游錄相示而都太僕游名山記得之蘇門曹用晦又於陸道涵所得喬太宰海嶽行記至時時以名集文記指示則濮陽李伯承為多若廣所未備亟有俟於博雅君子焉

嘉靖四十四載歲在旂蒙赤奮若如月哉生明

括蒼何鐘振卿編輯
廬陵吳炳用晦校正

46

古今游名山記

一七卷(存第一五至一七卷) 一冊 明・何鐘輯 嘉靖四四年(一五六五)刊
縱二四〇×横一五・九cm 每半葉匡郭:縱一九・七×横一三・七cm
(請求記号四九二二〇二一 一 写字台文庫)

中国各地の名山記である。明・何鐘輯、嘉靖四四年(一五六五)刊本。「括蒼何鐘振卿甫編輯、廬陵吳炳用晦甫校正」と題す。一四行二七字、小字双行も同じ。白口、左右双辺、まま黒白単魚尾がある。版心には刻工名が見える。

本来は、本願寺歴代宗主の文庫である写字台文庫の蔵書として、全一七巻が揃っていた。しかし、その後分かれたってしまったようであり、第一五巻から一七巻は明治時代に龍谷大学に寄贈された。一方、第一巻から第一四巻までは、第二二代宗主大谷光瑞師が、自身の蔵書として中国の大連に移したため、戦後接收されて大連図書館の所蔵となった。因みに大連図書館では、貴重書である「国善」図書に指定されている。

貨幣の我國金本位に對しては、米金貨團の換算の倍少、
 是は、實に、銀貨團に對して、一層、低價標準に當る、是以
 今、米幣幣制の存続に對して、米銀貨團の換算の倍少、
 新貨幣組の存続に對して、米銀貨團の換算の倍少、

英 金本位
 12 Pence (12d) / crown (1) 約 四十九圓
 20 Pence (20) - half (£1) 九圓八十錢

佛 圓 法郎 1 Franc 約 三十八圓
 100 Francs / 1000 Francs 約 三十八圓
 未 金 加拿大 金 = 同

100 cent / 100 dollar \$1 二圓三錢
 法 金
 100 Pence / 100 Mark 四圓八錢

露 圓 金
 100 Ruble / 100 一圓 一圓二錢
 和 金

100 cent / 100 florin gulden guilder 約 八十一圓

印度 金
 16 Rupee = 16d 約 四十九圓
 15 Rupee - half (£1) 九圓八十錢

印度 - 銀行 1899年九月十二日以下 英半圓に法貨10 Rupee

47 旅行教範

紙本ペン書 明治時代 縦二五・四×横二〇・三cm
 (請求記号〇二四一一二九一)

『旅行教範』は一冊のノート(五九頁)に横書きで書かれたもので、
 蹟調査にあたって留意すべき点を三〇六項目にわたって箇条書きにした
 ものである。明治四四年(一九一)五月二一日、光瑞の命によって下関
 より出発した第三次探検隊員、吉川小一郎に与えられた教範である。こ
 の『旅行教範』は大谷光瑞が口述した内容をノートに筆記したもので、
 誰が綴ったのか不明である。この指示書の冒頭には、「旅行の主とする
 所は見聞にあり。故に凡百の事、皆是れを以て基準となすべし」とあり、
 以下二五行にわたって、その綱領が記されている。そして、第一部「多
 数旅行」、第二部「単独旅行」、第三部「旅行日誌の形成」、第四部「書
 籍及び器具・飯食品」、第五部「調査要領」、そして第六部「付表」では、
 度量衡・貨幣・重量の換算表が含まれている。大谷光瑞の実体験に基づ
 く実用的なガイドテキストと言える。



48

トランシット・高度計・懐中時計

明治時代

トランシット・高度計・懐中時計は、吉川小一郎が使用していた機材である。トランシットは、クリノメーター(経緯儀・傾斜儀)の一種で、測地測量や気象観測用などの種々のタイプがある。蓋にはJapanese Kelvin & James White Mfg. Co., Ltd(ケルビン&ジェームズ・ホワイト株式会社 日本支店)の刻印が見られる。高度計は、ロンドンのダートン社製、懐中時計はロンドンスミス・アンド・サン社製である。なお、第二次探検隊員の橋瑞超は、探検用時計や計測機器類をロンドンで購入している。大谷光瑞が探検隊員に与えた指示書『旅行教範』には、集団調査中の基本時計はクロノメーターを使用し、グリニッジ標準時に合わせておくと言っていた。



佛說延壽命經

尔時去尊在娑羅雙樹間臨般涅槃有
 眾比丘比丘尼優婆塞優婆塞女皆來集會
 有一菩薩名曰延壽致跪合掌前白佛言女
 尊我等四眾皆來集會奉請如來莫入
 涅槃唯願如來哀憐我等勸請令住一切
 莫入涅槃

尔時去尊告延壽菩薩汝等諦聽吾當為
 汝分別解說吾後成佛已來經今四十九
 年教化眾生上至飛鳥下至蟻子蠢動含
 識有形無形四足兩足多足无足胎卵濕
 化如是眾生盡令過善知識而登正
 覺照我无異吾今欲入涅槃本為汝等

49

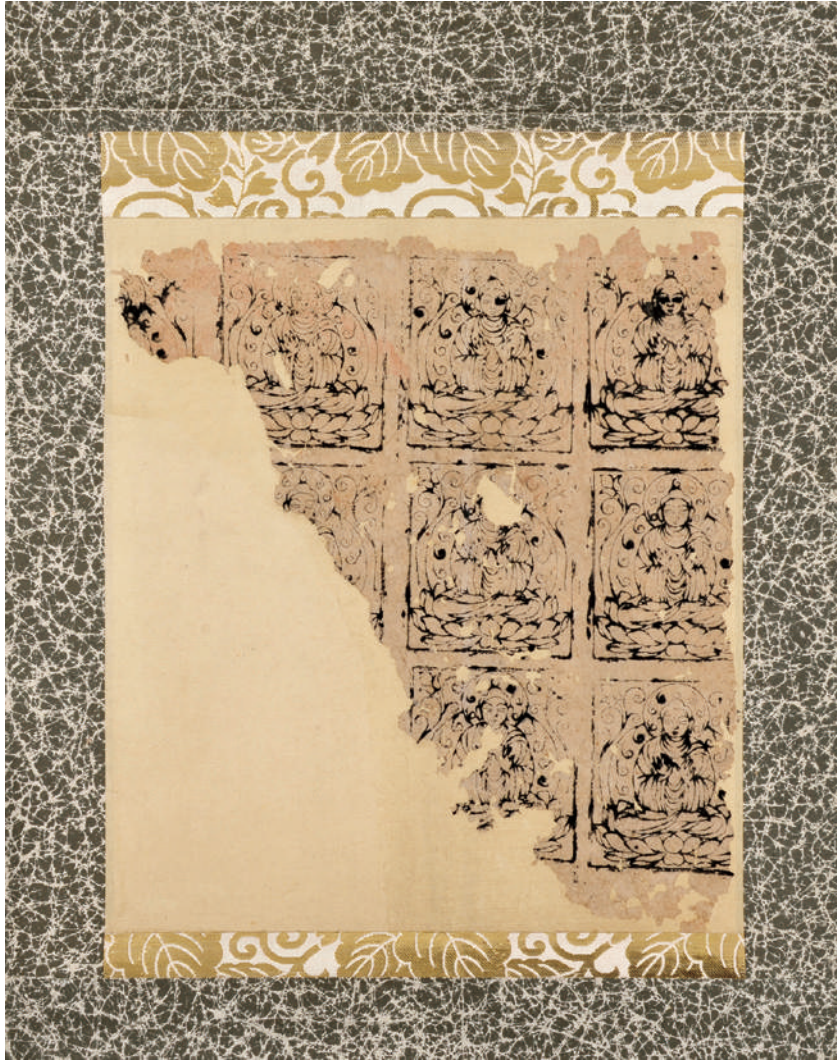
仏説延壽命經

紙本墨書 敦煌 後周・広順三年(九五三)

縦二五・八×横一三・六cm

(請求記号西域一〇〇三三)

この写本は、大谷探検隊が敦煌よりもたらした資料の一つである。この経典には、寿命を延ばすという祈願に関連しつつ、「子が病めば慈母も病み、子が癒されれば慈母も癒されるように、すべての衆生に対して菩薩は大慈悲心を持っている」などと『維摩経』の所説を引用しているように教説が説かれる。本経はすでに唐智昇撰『開元釈教録』(七三〇年)に偽経とされているが、敦煌では同じ経典が多く発見されている。偽経とされながらも、書写され続けてきた経典であることがわかる。このような経典は、その多くが願文とともに書写されている。この写本の奥書にも、後周(五代)の広順三年(九五三)に太保の任についていた人物とその夫人が、息子を亡くしたことから書写し供養したものとある。



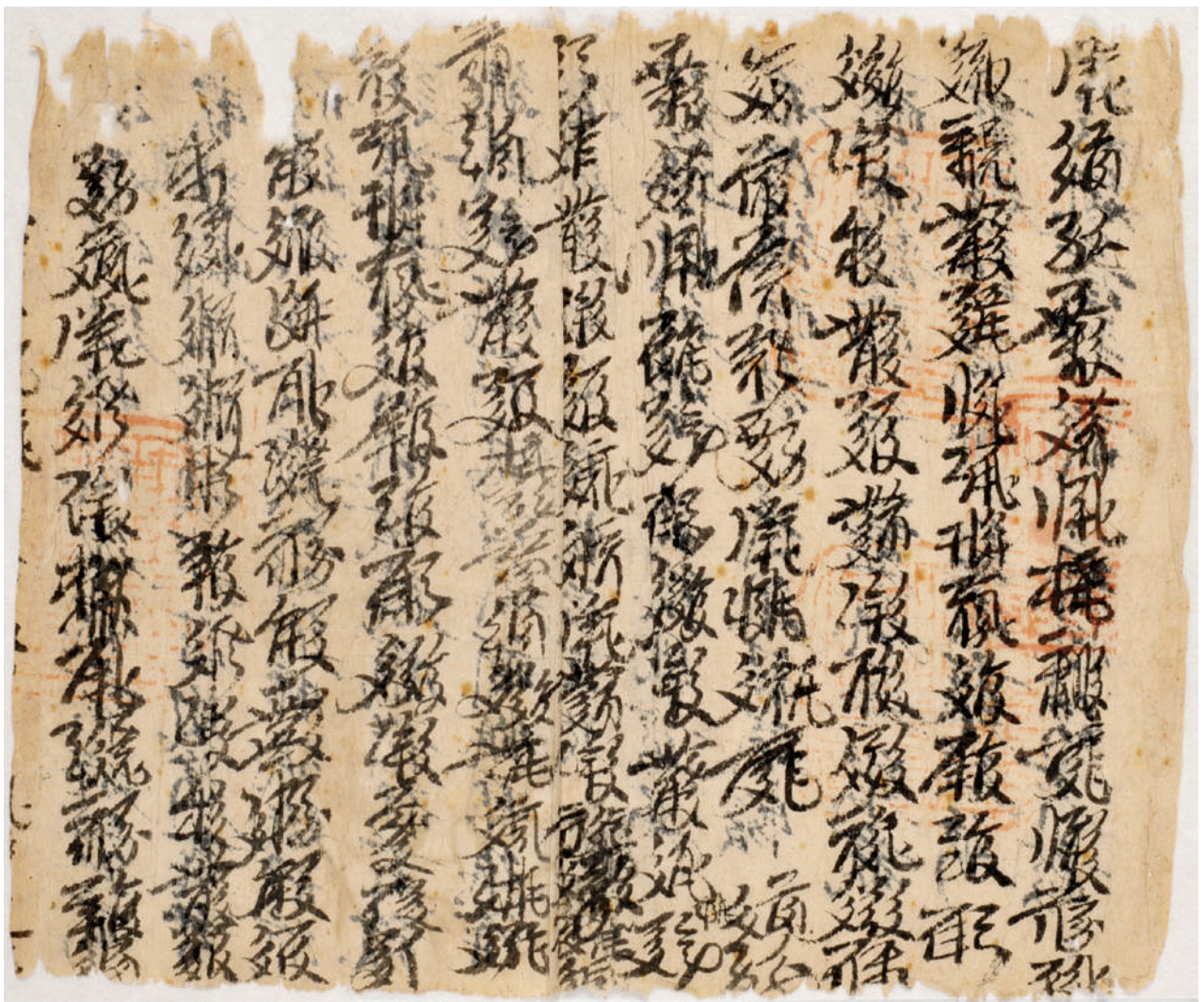
50
印いん
沙さ
仏ぶつ

紙本印影 トルファン 七〜八世紀

縦二七・六×横一四・八cm

(請求記号西域六五)

大谷探検隊がトルファンよりもたらした印沙仏。紙に仏像の印影を一体ずつ捺し並べたものを印沙仏という。仏教では無数の意味を表す用語の一つに「ガンジス河の砂(恒河沙)」というのがあり、印沙仏の「沙」は恒河沙の沙である。無数の仏像印を捺し並べるといふ儀式(印沙仏会)が敦煌で行われていたことは敦煌写本の中に「印沙仏文」なる祈願文が存在することわかる。トルファンでもその儀式は行われたようで、ドイツ隊もトルファンで印沙仏を数点収集している。大谷探検隊がもたらしたトルファン出土のこの印沙仏では、仏が九体残っており、枠の中の仏は独尊で蓮華座上に坐し、大衣を通肩にまとい、説法印を結んでいる。印沙仏は、多くの仏像を造れば多くの功德が得られるとの考えに連なるもので、仏像印を捺し並べるといふこの簡易な方法は日本にも伝えられた。



51

西夏語六祖壇經

紙本墨書 出土地不明 一三〜一四世紀

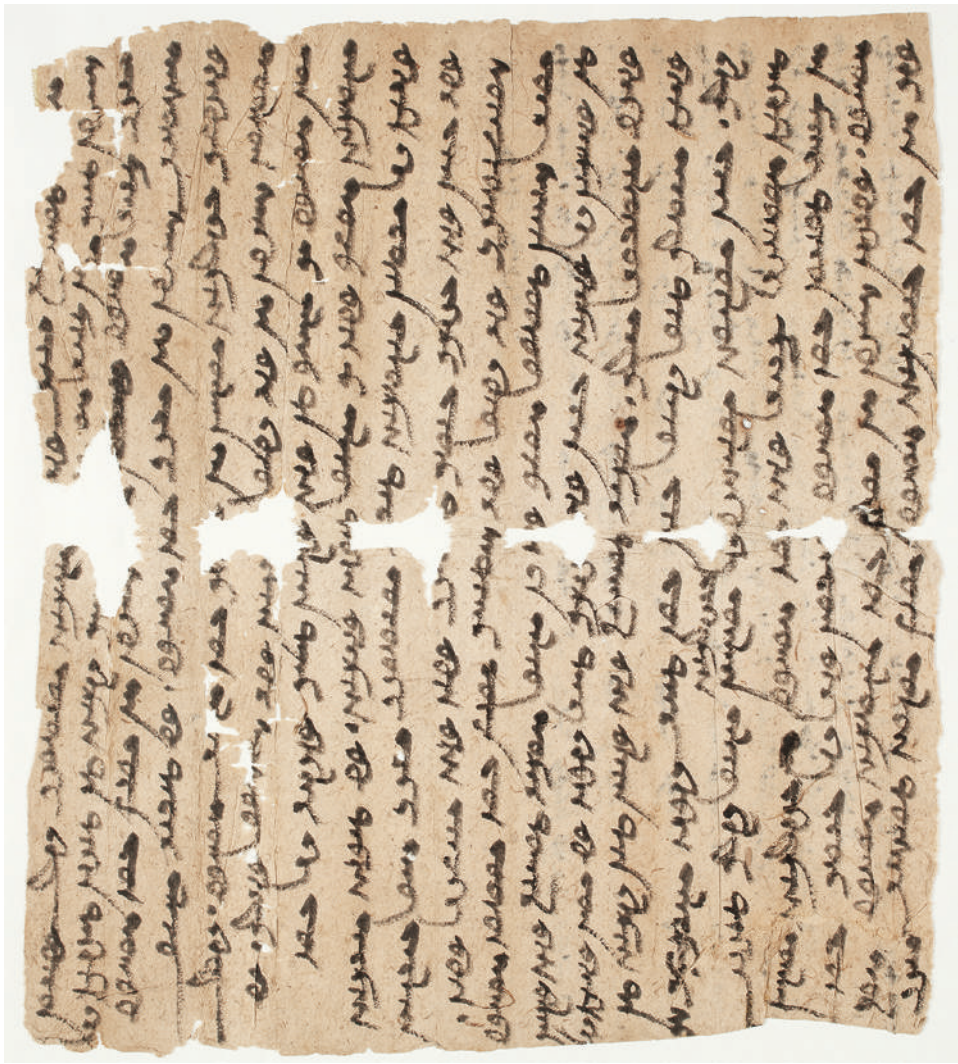
縦二四・〇×横二九・五cm

(請求記号西域一〇九〇)

西夏語・西夏文字は、西夏国が滅びた後も、西夏人がモンゴル元朝下で優遇されたため、文字は一四世紀末頃まで主として仏教文献の上に活かされてきたが、その後は使用されなくなり忘れ去られた。近年、文字の解説がすすみ構成原理が解明されたが、まだ不明な点も多い。『六祖壇經』の西夏語訳は一〇七一年に完成したらしいが、本資料は西夏文字の草書体で書写されており、時代はさがる。

『六祖壇經』は、禅宗代六祖慧能(六三八〜七一八)の語要を集録したもので、その内容は北宋禅に対して南宋禅の優位をうたい、頓悟・見性の思想を説いている。この文献は敦煌・朝鮮半島・日本に広く流伝し、数多くの異本が生じた。そうした『六祖壇經』の成立史の中で、西夏語訳本のもつ意味は大きい。

最近、本写本と同様に大谷探検隊収集で、現在旅順博物館に所蔵されている『六祖壇經』漢字写本の図版が出版された。



52

ウイグル語収支決算報告書^{ウイグル語収支決算報告書}

紙本墨書 トルファン 一〇～一二世紀

縦三〇・五×横二七・二cm

(請求記号西域一四一五)

天山北麓の西ウイグル王国の北の首都ビシュバリク(北庭)や南の首都コーチョー(高昌)が言及され、葡萄酒・棉布・棉花・マットレス・皿などの商品や、通貨として用いられた「官布」(政府が規格を定めた布)の支出先として王族や官僚の人名が記録されている。個人の商取引か、それとも公的な出納に関するものかは不明ながら、当時のシルクロード経済の実態を示す史料として貴重である。ちなみに、この文書では葡萄酒一甕の値段を三三〇官布と記録しており、「ウイグル語財産記録・土地売買契約証文」での土地の売買価格と比較して、古代トルファン社会での物価水準などを考えることも可能になる。



53
菩 薩 頭 部

塑造 カラシャール 五〜六世紀 高一〇・五cm

第二次大谷探検隊員・野村栄三郎の将来品で、かすかな微笑を湛えて前方を見つめる菩薩像の頭部。髪は左右対称となる定型化された表現で、頭上に高く結い上げている。目・鼻・口などが顔面の中央に寄り、その分だけ額がやや広くなるのは、当該期の中央アジアで出土する塑像や壁画に共通する特徴である。一方で、鼻下の人中を円形にくぼめる点や、唇下にも同様のくぼみが認められる点は、パキスタンのタキシラ周辺、およびアフガニスタンのハッダ周辺などで出土するストウツコ像と共通しており、広義のガンダーラ地域と西域とが密接に関係していたことがうかがえる。

本像は、木または何らかの植物性の芯棒にササや砂混じりの粘土を付けて造形し、表面を精緻な土と漆喰で仕上げる作りで、おそらくは彩色も施されていただろう。この過程で型を使用した可能性がしばしば指摘されるが、明瞭な痕跡が残っていないため断言することはできない。

龍谷大学大宮図書館 二〇一六年度特別展観

龍谷大学大宮図書館 今昔物語

開催期間：二〇一六(平成二八)年一〇月一三日(木)～一〇月二一日(金)

二〇一六(平成二八)年一〇月

編 集 .. 龍谷大学大宮図書館

発 行 .. 龍谷大学大宮図書館

〒601-8506 京都市下京区七条通大宮東入大工町一二五-1

電話(〇七五)三四三-1331(代表)

協 力 .. 本願寺史料研究所・龍谷ミュージアム

印 刷 .. 株式会社 図書 同朋舎

写真撮影 .. 堀出 恒 夫(第一スタジオ)

著作権等は、龍谷大学に帰属します



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY